

ソ連の脅威の新たな段階とアイゼンハワー政権の封じ込め政策(下)¹⁾

——一九五〇年代後半——

佐々木卓也

- 一 はじめに
- 二 ソ連の脅威の新たな段階、一九五五～五七年
- 三 アイゼンハワー政権の封じ込め政策、一九五五～五七年
- 四 封じ込めの軍事的強化を求める主張の増大、一九五五～五七年
- 五 「全面的冷戦」とアイゼンハワー政権の対応、一九五八年（以上五二号）
- 六 安全保障政策をめぐる議論
- 七 モスクワのアメリカ博覧会と封じ込め、一九五九年夏
- 八 人的・文化的交流の深化、拡大と封じ込め
- 九 ミサイル・ギャップ論争の進展
- 十 U二機事件と封じ込めの行方
- 十一 おわりに（以上本号）

六 安全保障政策をめぐる議論

一九五九年一月二七日、フルシチョフ (Nikita S. Khrushchev) ソ連首相は第二一回共産党大会で、挑発的な声明を発表した。彼は「ICBM (大陸間弾道弾) の連続的生産を組織化した」と発表したからであった。これに対して、ダレス (Allen W. Dulles) 中央情報局 (CIA) 長官は国家安全保障会議 (NSC) で、フルシチョフ声明がソ連のICBM戦力に関するアメリカ側の情報評価に「ぴったり合っている」と言明した。彼が依拠する前年一二月の国家情報評価 (NIE) によると、ソ連は「おそらく一九五九年度のある時点において」、一〇基のICBMの原型を初めて実戦配備する能力を獲得するというものであった。この頃上院外交委員会に出席したトワイニング (Nathan F. Twining) 統合参謀本部議長も同じ見解を表明するとともに、ソ連が一九六〇年度、あるいは六一年度前半に一〇〇基の、六二年度中には五〇〇基のICBM実戦配備能力の「可能性」を指摘した。大統領の科学・技術問題の顧問のキスチアコフスキー (George B. Kistiakowsky) に至っては、「個人的意見」ながら、ソ連が「現在」、実戦配備可能な長距離ミサイル戦力を有しているという評価であった。⁽²⁾

これに対して、アイゼンハワー (Dwight D. Eisenhower) 大統領は依然として、ソ連のミサイル戦力の水準に懐疑的であった。彼はキスチアコフスキーの評価に、「その可能性」を認めながらも、そのような兵器の「数と正確さ」に疑問があると言い、さらにソ連はミサイル兵器を使用する場合、アメリカの報復にあうことを予測しなければならぬと述べた。いずれにせよ、「ソ連が報復を恐れる理由を持つことなく十分なミサイルを有するまでには、少なくとも数年はかかる」というのが大統領の意見であった。そしてアイゼンハワーは、「自称軍事専門家」の言動をとりあげ、彼らをソ連の奇襲攻撃を恐れる余り、戦略空軍を常に空中で待機させることを主張する「神経症患者」だと形容し、アメリカが「合理的に充分な国防計画」に立脚する必要を改めて力説したのである。⁽³⁾

アメリカの軍事力に対するアイゼンハワー政権の自信は、不変であった。ダレス (John Foster Dulles) 国務長官は三月六日、ハーター (Christian A. Herter) 国務次官に対し、ベルリン問題をめぐり、「もしわれわれがその立場で堅固であれば、個人的には、ソヴェエトが戦争の水準まで事態をもっていく可能性は千に一もないと確信している」と述べ、二週間後には、入院中の病院で会ったマクミラン (Harold Macmillan) 英首相に、「わが国の現在の相当な力は共産主義者の帝国主義的侵略の抑止とみなされている」と言明した。マッケルロイ (Neil H. McElroy) 国防長官、トワイニング統合参謀本部議長もダレスに続いた。マッケルロイは上院外交委員会で、アメリカの軍事力がモスクワをして、「わが国に対する攻撃がソヴェエトの国土に受容しがたい損害を与える結果になることを認識させるに充分である」と証言し、核戦力の充分性の概念を確認した。彼はさらに、ソ連のミサイルの実戦配備には当初見通しより時間がかかりそうなこと、アメリカがミサイル開発に「急速な進展」を示していることを理由に、「ミサイル・ギャップは最近狭まった」と主張したのである。トワイニングはソ連のミサイル攻撃を恐れる人々の主張をすべて受容するなら、国防費だけで七〇〇億ドルに及ぶと警告し、アメリカの空軍の規模はソヴェエトの四倍であり、質は一〇倍良好であると保障した。⁽⁴⁾

しかもアイゼンハワー政権はソ連の核戦力評価に対応したミサイル戦力の拡充を着実に進めていた。翌年一月までに、ICBMの二七〇基 (アトラス型一三〇基、タイタン型一四〇基) への、ポラリス型潜水艦の一五隻 (SLBM一八〇基搭載可能) への増加を承認するからである。これにより、ソ連が六二年度末までにおそらく獲得する五〇〇基のICBM戦力——それはアメリカ側が最悪のケースとして恐れた水準であった——に、ほぼ匹敵するはずであった。核爆弾の増え方も飛躍的であった。一九五七年に五五四発、五八年に七三四五発であったが、五九年についに一万発を突破して一万二九八発に、六〇年には一万八六三八発に達するところであった。⁽⁵⁾

だがミサイル・ギャップ論の唱道者のソ連の核戦力評価はより劇的であった。一九五九年二月初旬のニューヨーク

ク・タイムズは、「国防問題に精通した多数の専門家」の話として、ソ連のICBMが一九六〇年に一〇〇基、六一年に五〇〇基、六二年に一〇〇〇基、六三年に一五〇〇基、六四年には二〇〇〇基に達すると報道した。翌年に迫った民主党大統領候補争いを射程に置くサイミントン (W. Stuart Symington) 上院議員は三月、政府が「事実によって正当化できない自己満足」に国民を陥らせていると攻撃し、「三年の内に」、ソ連が三〇〇〇基のICBMを獲得すると予告したのである。サイミントンと同じ上院軍事委員会に所属するジャクソン (Henry M. Jackson) 民主党上院議員も、四月半ばのナショナル・ウオー・カレッジの講演で、アメリカの力の低下に警鐘を鳴らし、「現在われわれは冷戦を失いつつある。……共産圏の力に対するわが国のそれは衰退している。わが国は軍事力、経済力、科学力、政治的影響、心理的影響の分野で次から次へと後退している」と分析した。その上でジャクソンは、「非脆弱な軍事的抑止の早期開発」、「年率五%から六%の経済力の拡大」、「とくに科学と外国語」の教育の強化、開発援助の増額等を提案し、さらに「われわれは軍備計画を拡大し、われわれに強いられるどんな戦争にも勝利を収めるに必要な力を開発するべきである。……われわれは新たな兵器体系の競争の上で、決定的なリードを勝ち取り、保持するに必要なことを何でもやるべきである。そして同盟国と協同して、限定的侵略に対しては限定的手段によって、自由世界を守るに充分な力を開発するべきである」と主張したのである。⁽⁶⁾

やはりミサイル・ギャップ論の急先鋒のケネディ (John F. Kennedy) 上院議員も同様であった。彼は一月の上院外交委員会において、トワイニング統合参謀本部議長にミサイル・ギャップの存在を認めるか否かを執拗に迫り、アメリカがソ連に軍事的劣勢にたっていることを強調した。彼はさらに三月のインタビューで、アイゼンハワー政権の安全保障政策を一九三〇年代のイギリスの対ドイツ政策と同列に論じ、政府が財政赤字の発生に拘泥するあまり、アメリカの安全を犠牲にしていると批判したのである。「私は軍事力に関するアイゼンハワー政権の論理は三〇年代のイギリスのスタンリー・ボールドウィン (Stanley Baldwin) [首相] の予測、すなわち敵国の能力を大幅

かつ恒常的に過小評価しているという点で、よく似ていると思う。ソ連が正確な大陸弾道弾を建設していることに疑いはない。私の考えでは、現政権が究極の兵器の分野でわれわれをソ連の劣勢に立たせることでわれわれに直面させる危険よりも、不均衡予算の危険の方がはるかに小さい。」⁽⁷⁾

民主党諮問会議は七月のペーパーで、政府の「ニュールック」が「大失敗」であり、「今やほとんど過ぎ去った戦略核の優位に対する依存の増大」であると決めつけた。そしてこのペーパーは、「核兵器がすべてを達成できるとの信念をもって、儉約を国家安全保障の上位におくことは、もはや可能ではない」と宣言し、「わが国が失いつつある戦略的核戦力の対等の立場を可能限り早急に回復すること」をうたった。つまりこのミサイル・ギャップを「埋める緊急の努力」が最優先課題であり、あわせて政府の「無視と無知により最も過酷な取り扱い」を受けてきた陸上兵力の二二万五〇〇〇名増が必須であった。このために今後四、五年間に年額約七五億ドルの国防費増を要するが、このペーパーによると、アメリカの経済は年率5%の成長が可能であり、この成長分だけで七五億ドル程度の支出は充分容易であった。⁽⁸⁾

世論は民主党の政府批判を共有しているようであった。一九五九年二月のギャップ調査によると、軍事力でソ連がアメリカに先行していると答えた者が三四%、アメリカと答えた者が二四%、同等と答えた者が二五%であった。一二月の調査によると、長距離ミサイルの開発でどちらが先行しているかとの問いに、ソ連と答えた者が四七%であったのに対し、アメリカと答えた者は三三%に過ぎなかったのである。⁽⁹⁾

しかも問題は核ミサイルだけでなかった。民主党の批判の対象は、ジャクソン演説がとくに示すように、大量報復戦略そのものに及んでいたからであった。すでにこの問題はキッシンジャー（Henry A. Kissinger）、オズグッド（Robert Osgood）ら国際政治学者、あるいはゲイサー報告書（一九五七年一月）が提起し、政権内でも前年に激しい議論を呼んでいた。ダレス国務長官がこの年一月二二日のNSCの会合で、再び口火を切った。彼はNSC五四

一〇／一「ソヴェイト圏との全面戦争におけるアメリカの目標」の「暗黙の前提」はアメリカが限定戦争を考慮に入れる必要はないというものと不満を述べ、この前提は「再検討を要する」と言明したのである。ハーター国務次官も同感であった。彼は米ソが関わる軍事紛争が「自動的に全面戦争」に陥ることを懸念し、核兵器の先制使用を恐れる同盟国に「心理的問題」をつくっていると憂慮した。ハーターの「恐れ」は「小規模な作戦を実施するにあたっても、わが国がそのような戦争で使用可能な他の兵器がないが故に、核兵器を使用する以外に選択がないということ」であり、彼は「ある状況のもとで、核兵器の使用に代わる手段があるべきだ」と提案したのである。

グレイ (Gordon Gray) 国家安全保障問題担当大統領特別補佐官によると、国務省が言わんとすることは、「核兵器を使用することなしに限定的作戦に従事するために、現在有していない能力を開発するべきである」ということであり、「現在より大きな通常兵力を持つか否か」ということであった。これらの主張の背後には、大量報復戦略の見直しを求めてきたスミス (Gerard C. Smith) 国務省政策企画担当次官補の働きかけがあった。⁽¹⁰⁾

アイゼンハワー大統領はすぐに反論にでた。彼は、「わが国が相当数の米軍を動員する所であるならばどこでも、利用可能な核兵器を用意しなければならない」と大量報復戦略の基本を繰り返したが、したがって、問題は「どのような状況で核兵器を行使するのか」ということであった。そして大統領は「あまりに多くの可能性に該当する概念を見つげようとする」試みを危惧し、職業軍人出身らしく、事前に起こり得るあらゆるケースを想定する愚を説いた。しかも彼は、アメリカの現在の一個師団は第二次大戦中の一個師団よりも大きな軍力をもっていると指摘し、現行の通常兵力で充分であると説明した。バーク (Arling A. Burke) 海軍作戦部長が「世界中で多くの小規模戦争に将来直面するかもしれない」と警告した時、アイゼンハワーはそうは思わないと否定し、「真の危険」は自由世界に対するソヴェイトの「政治的・経済的侵略に由来する」と反駁したのである。

マツケルロイ国防長官も大統領に歩調を揃えた。マツケルロイは財政的な意味合いを指摘し、「わが国の通常兵

力の建設の財源を追加支出するために戦略的攻撃力を削減するような政策の賢明さ」に疑義を呈した。そして彼は統合参謀本部での「完全な一致」として「全面戦争に対するわが国の核の抑止を維持する死活的な必要性」を強調したのである。⁽¹¹⁾

結局、大統領は七月九日のNSCの会合で、「過去六年間われわれが追求してきた基本的な軍事政策・計画を変えつつもりはない」と語り、安全保障政策の見直しを拒否した。彼は確かに国務省に歩み寄り、八月五日のNSC五九〇六／一「基本的な国家安全保障政策」において、NSC五七〇七／八と五八一〇／一の「核兵器に唯一ではないせよ、主たる依存をすること、核兵器を兵器廠の他の兵器に統合すること、核兵器を軍事的観点からは通常兵器とみなすこと、国家目標を達成するために必要な時には核兵器を使用することがアメリカの政策である」に次の一文——「軍事計画は、核兵器の使用が明らかに、国家目標を達成するために軍事的に必要でも適切でもない地域、とくに主要な共産主義国家が関係しない地域での全面戦争に至らない状況を考慮するべきである」——を加えることには同意した。しかし同時にアイゼンハワーは注で、この文章が「政策の変更と解釈されるべきではなく、むしろ既存の政策の明確化」であると大統領は「理解している」と明記させることで、従来の戦略との継続性を強調したのである。⁽¹²⁾

大統領の言葉が示すように、兵力数の減少は続いていた。マッケルロイ国防長官の五九年一月の報告によると、前年比で陸軍兵力八七万名と海兵隊一七万五〇〇〇名はそのままであるが、海軍兵力は六三万名より六一万九〇〇〇名へ、空軍兵力は八四万五〇〇〇名から八二万五〇〇〇名へ減少し、総計で三万一〇〇〇名減っていた。⁽¹³⁾

アイゼンハワー大統領もダレス国務長官も冷戦は長期的な闘争であるが故に、アメリカがそのリベラルな政治・経済体制を堅持しながら、ソヴィエト体制の変質を促す適切な対抗措置をとることが必要であると信じていた。その際に何よりも警戒しなければならないことは、長期にわたる過大な軍事費の負担であった。大統領は三月一〇

日、議会指導者に対し、フルシチョフが前年一月に提案した半年以内のベルリン問題解決——西ベルリンからの西側軍の撤退の要求とソ連が東ドイツ政府と平和条約を結ぶ用意の表明——に関連する形で、「もしソ連が強引に要求するたびに、われわれが三〇億ドルを予算に加えていけば、やがて軍事国家へとつながるであろう」と警告した。二ヶ月後にはキスチアコフスキーら科学・技術顧問に、彼が奉じる「基本的真実」を紹介し、過大な国防予算がアメリカの体制に与える否定的影響に懸念を表明した。「私は、現在わが国が拠出している重い軍備負担を維持し続けことができるとは考えていない。不可避免的に、わが国は社会の統制に向かうか、あるいは少なくとも官僚の支配に向かわざるを得ない。⁽¹⁴⁾」

したがってアイゼンハワーはソ連の挑戦や挑発にも冷静であった。彼は三月の会合で、「われわれは今後四〇年間ベルリンのような問題に耐える用意がなければならない」と説き、ソ連の行動に対する「過剰な反応を避ける必要を強調」した。「過剰に反応することで、われわれはソヴィエトに攻撃材料を与えている。……フルシチョフはアメリカを狼狽させたいだけなのだ……。この「ベルリン」問題を六ヶ月ではなく、四〇年の単位で対処しなければならぬ……。この間に、ソヴィエトはしきりに、われわれの平静を失わせようとするであろう。」上院の実力者ラッセル (Richard B. Russell) 上院軍事委員長 (民主党) がアメリカにさらなる軍事力は必要なのか質問した時にも、大統領は「何も必要ではない」と回答し、「実際に全面戦争に行く決定はないであろうとの確信」を表明したのである。⁽¹⁵⁾

ダレス国務長官も同様であった。彼は一月五日の議会指導者との会合で次のような展望を明らかにした。「もしわれわれが時間を正しく使うのであれば、時間はわれわれに有利に働くであろう。共産圏の自信の主な理由である経済的な要因は永続的であり得ない (傍点部分はオリジナル下線)。……ソヴィエトはこれまで、従順な人民を利用することができたが、その経済体制は、ある程度の教育が人民にとってそれを支えるために不可欠であることを意

味している。この教育が従順な態度を減少させるであろう。……わが国の模範が全世界に影響を与える間、私はわが国の政策は事態を掌握するであろうと信じている。最終的に、現在の異常な状況は変わると思う。」さらにダレスは一月二七日の記者会見で、ソ連内では「独裁制、専制から離れる進化」があり、「政治的決定のためにより広い基盤、個々人の行動、思想という点で個人のより大きな安全、選択のより大きな自由の広範な基盤が発展している。共産主義は異なる種類の社会へ進化するであろう」と観察し、封じ込めの成果を強調したのである。大統領も、三月八日の会合で、ダレスの展望を復唱し、封じ込めの前提を確認した。「わが国の長期的な政策とは、ソヴェエトが国民を教育するまで、現在の立場を維持することである。そうすることで、ソヴェエトは敵意に満ちた勢力としての共産主義の破壊の種子を蒔くであろう。これは長い時間にかかることである。」⁽¹⁶⁾

アイゼンハワー政権はソヴェエト体制の変容を促すために、封じ込めの新たな手段を行使する準備があった。NSC 五六〇七（一九五六年六月）にもとづく人的・文化的交流の推進であった。その有力な手段として、モスクワにおけるアメリカ博覧会の実施があった。

七 モスクワのアメリカ博覧会と封じ込め、一九五九年夏

アイゼンハワー政権は早くからモスクワにおける博覧会の開催に意欲的であった。一九五五年夏以降、ソ連当局との間で話し合いを始め、五六年秋には、翌年夏の博覧会実施について話し合いがほぼまとまり、ダレス国務長官は会場の視察のために、一〇月に代表団を送ったほどであった。国務省切つてのソ連専門家であるボーレン（Charles E. Bohlen）駐ソ大使も乗り気であった。しかしこの直後のソ連軍のハンガリー介入により、アメリカ政府は暫時対ソ交流を中止しなければならなかった。アイゼンハワー政権は五七年春に交流を再開したが、博覧会の協議は不調に終わっていた。⁽¹⁷⁾

アメリカ政府にとって、博覧会の開催は冷戦の闘いの一環であった。一九五七年五月、国家安全保障会議で関係機関の調整にあたる活動調整部 (Operations Coordinating Board-OCB) は、アメリカ博が「NSC五六〇七が策定した国家政策にかなう有益な、そしてこれまでのところユニークな機会」を提供するであろうと述べ、次のような影響を期待した。「博覧会はアメリカの生活の現実に関する目に見える証拠により、ソヴェエトの多数の人々に直接達する媒体となるであろう。よく考えられた品物と広報資料の展示はソヴェエト国民に対し、新しい、そして望むべくは、示唆に富む事実を提供し、対外世界全般の、とくにアメリカの情報に関する共産主義国の誤伝、歪曲、そして組織的隠蔽と闘う機会を与えてくれよう。」翌月には、東西交流担当のレイシー (William S.B. Lacy) 大使が議会で、モスクワでのアメリカ博は「黄金の機会」であり、ソ連の労働者とエリートに対する「大いなる魅力」となると証言し、このOCB文書と趣旨を語ったのである。⁽¹⁸⁾

すでにアメリカ政府は、一九五八年春から秋に開催されたブリュッセル万国博覧会には、内外の憂慮——ソ連による人工衛星の打ち上げ成功、アメリカ国内での人種差別的な事件——を背景に、アメリカの威信を賭け、ソ連に對抗するという冷戦的発想に基づいて参加を果たした。このブリュッセル万博は単なる博覧会ではなかった。ブリュッセル万博は一九二八年のパリ国際博覧会協約による催しであり、その始まりは水晶宮で有名なロンドン万博 (一八五一年) にたどることができた。パリ協約に基づく博覧会は一九三八年にニューヨークで開催されて以来、二〇年ぶりのことであった。アメリカの事務局長カルマン (Howard Cullman) は「適度な予算により、われわれはアメリカのために、文化的、知的、精神的にスプートニクをおこなうことができる」と説き、「リトル・ロック (黒人学生の公立高校への入学を白人住民が実力で阻止したことに端を発した事件)、スプートニクといった国際状況のもと、アメリカ政府が約四〇〇〇万人の参加者を引き寄せる重要な博覧会に、最高水準でその約束を果たさないことは、悲劇的である」と語ったのである。⁽¹⁹⁾

アイゼンハワーもその意義を良く認識していた。彼は一九五七年一月、ダレス國務長官に、「もし再びソ連がわが国よりも、今度はブリュッセルで光彩を放つことがあれば、非難をされるべきは我々である」と書き、国家的威信をもとに出展することを約束した。大統領はブリュッセル博のための諮問委員会を設置し、委員には芸術、建築、工業デザイン、工芸、科学、音楽、舞台、映画などの分野から専門家を起用した。さらにデイズニー（Walt Disney）¹⁹、ジャクソン（C.D. Jackson）、クック（Alistair Cooke）、リップマン（Walter Lippmann）、ニーバー（Reinhold Niebuhr）、ロストフ（Walt W. Rostow）、シムジンジャー（Arthur Schlesinger）、リースマン（David Riesman）など有識者が顧問として協力した。アイゼンハワー大統領はフーヴァー（Herbert C. Hoover）元大統領——第一次大戦中のドイツ占領下のベルギーに対する食料援助で知られていた——を代表として、七月初旬のアメリカの「ナショナル・デイズ」のために派遣した。アメリカのパビリオンで人気を得た展示はICBMのRAMACコンピュータ、カラーテレビ、ファクションショー、「家族」写真展、サーカラマ（デイズニー製作の三六〇度のカラー映像）、投票機械等であった。さらにサラ・ボーン（Sarah Vaughan）、ハリー・ベラフォンテ（Harry Belafonte）ら歌手の出演、メニューイン（Yehudi Menuhin）、フライシャー（Leon Fleisher）らのクラシック音楽家の公演、クライバーン（Van Cliburn）、スターン（Isaac Stern）とオルマンディ（Eugene Ormandy）指揮のフィラデルフィア・オーケストラとの共演、アメリカン・バレエ・シアターの公演があった。カルマン事務局長の見積もりでは、これら一連の公演は約二二万名の観客を動員した。また重要なことに、ヨーロッパの言語に通じた一九一名のアメリカの若者がパビリオン・ガイドとして参加し、現地で人気を博した。²⁰

これに対してソ連政府も、アメリカ政府によると、「財源と人材を惜しむことなく」、ブリュッセル博に参加し、アメリカのパビリオンと人気を分かち合った。冷戦の変容にともない、博覧会が米ソの闘争の新たな場と化した感があった。²¹

したがって、一九五八年九月に米ソ両国が翌年夏にモスクワとニューヨークでそれぞれの博覧会を開催することで合意に達したとのニュースは、アイゼンハワー政権の最も歓迎するところであった。アメリカがこの種の催しをソ連国内でおこなうのは一九一七年のボリシェヴィキ革命以来初めてのことと、まさに画期的なことであった。モスクワでのアメリカ国家博覧会は一九五九年七月二四日より九月四日まで、ニューヨークでのソヴィエト国家博覧会は六月二九日より八月一〇日まで開催されることになった。⁽²²⁾

合衆国広報庁のスタッフであるリード (Barrett Reed) は、アメリカ博覧会を「その対象とする人々はソ連の最も政治的に敏感で、潜在的には最も影響力ある市民であり、彼らに到達するために今だかつて獲得した最も素晴らしい機会」であると位置づけ、「ソヴィエトの侵略的性格を減少させる進化的展開を刺激する」というアメリカの対ソ政策目標に向けて、この博覧会の機会を「充分に利用する」ように提案した。彼の理解では、アメリカがこの目標を達成するにあたり、「ソヴィエト社会のなかで、とくにソヴィエト的な生活に不満をもち、より大きな行動の自由、福利と安全を求める欲求に根ざす知識人の動揺を促進することが最も効果的」なのであった。⁽²³⁾

したがって、やはり合衆国広報庁のシヴァード (Robert Sivard) によると、アメリカの技術と科学が消費者にどのように貢献しているのかを展示することが大事であった。なぜなら、ソ連国民により良い消費物資と生活水準への欲求を刺激し、政府に「さらなる圧力」をかけることが、「侵略的な能力を犠牲に、経済計画の修正をもたらす最も効果的な方法」と考えられるからであった。合衆国広報庁がアメリカ博覧のために作成した「基本政策方針」も二人の意見に立脚する内容であった。つまりこの報告は、博覧会の目的がアメリカに対するソヴィエト国民の理解を増進することであり、アメリカ人の生活様式、消費物資、もの考え方に力点を置くことで、「長期的には、より大きな自由に進むソヴィエト体制の新たな方向性への圧力」を形成する展開を期待したからであった。⁽²⁴⁾

ポーレンの後任のトンプソン (Llewellyn E. Thompson) 駐ソ大使も同じ考えであった。トンプソンは、「もしわ

れわれが適当な博覧会を提示することに成功するならば、モスクワでアメリカ博を催すこの機会の重要性を言い過ぎることはない」と述べた上で、博覧会のソヴィエト市民に対する「爆発的な効果」さえも予想し、アメリカにとって重要な政治的結果を伴う「計り知れない利益」をもたらすと予期した。そして大使は、合衆国広報庁と同様、消費物資の展示に焦点を置くように勧告し、ソ連国民に「わが国の技術と生活水準の優位」を示し、「彼らの現在の状況と最近達成された生活水準の僅かな改善に対する不満を刺激する」ように努めるべきだと提言したのである。⁽²⁵⁾

一九五九年一月に、アメリカ博の出版を話し合う会議がホワイトハウスで開かれた。冒頭、アレン（George Allen）合衆国広報庁長官は、この種の企画が「時間、努力、そしてお金の無駄であり、拙劣なアプローチである」と説く人々の議論を退け、「より多くの軍備を建設し、ソヴィエトが破産するまで待つ」以外の方法があるはずだと反駁した。アレンの考えでは、その方法の一つは、「このような形で開かれた手段をつうじ、アメリカについてロシア人の誤解を直そうとする」ことであった。あらゆる状況はロシア人が「外国のもの、とりわけアメリカ的なもの」に興味をもっていることを示していた。その例としてアレンは、雑誌「アメリカ・イラストレイティド」（アメリカーナ）がモスクワのニューススタンドで「ホットケーキ」のように売れていると説明したのである。

続いて国務省広報担当次官補のバーディング（Andrew Berding）が、今や省内で一般的となった見解、すなわち、東西交流がやがてはソヴィエト国内で好ましい結果を生むとの想定を改めて表明した。

現在、ソヴィエト国内ではある進化、たとえば僅か五年前にはなかった進化が起きていると思う。非常に限られたものとはいえ、より自由な言論に向かう進化である。生活の物質的なものに対するより大きな要求に対する進化、それはやはり非常に限られているが、進化が起きている。われわれは、ソ連との様々な交流、今回

のような博覧会のような行事を通して、その進化を促進することができると考えている。われわれは、その進化がソ連と平和を達成する唯一の機会であると考えている。…… 国務省のわれわれは、この博覧会がわが国の外交政策にとって非常に重要であると信じている。博覧会は展示品をつうじ、ソヴィエト市民に展示品のような品物に対するより大きな要求を引き起こすことができる。もしわれわれが消費物資に対する要求を増やすことができれば、究極的にその要求は重工業、あるいはとくに軍需目的の生産の可能性を減少させるであろう。ソヴィエトの資源は常に増大しているとはいえ、限られており、わが国よりも国民総生産の大きな割合を軍需生産に割り当てている。もしわれわれが、……ソヴィエト人民のより良い生活に対する要求の拡大に成功するならば、私はそのような漸進的動きをもたらすことができると思うし、ソ連が現在より軍事力には少ない力点を、人民の福祉にはより大きな力点を置き、アメリカについて……より啓蒙された見方をもつ水準にまで、その動きをもつていくことができると思う。⁽²⁶⁾

アメリカ政府は前年のブリュッセル万国博覧会を参考に出版を準備した。まずマッカラン (Harold C. McClair) 前商務次官補をアメリカ博覧会の事務局長に任命し、産業、科学、ジャーナリズム、芸術、教育の各分野出身の五一名からなる諮問委員会を設置した。この委員会にはマックグロー・ヒル、フォード、ゼネラル・モーターズ、クライスラー、ゼネラル・フーズ、マーシーズ、IBM世界貿易、リパブリック鉄鋼、ニューズウィーク、ワシントン・ポストなど全米有数の企業、会社の代表に加え、全米科学アカデミーの会長、国際教育機関 (IIE) の会長、プリンストン高等学術研究所のケナン (George F. Kennan) らが参加した。アメリカ博の展示物の多くはブリュッセルで称賛を得たものであった。⁽²⁷⁾

アイゼンハワー大統領はアメリカ博覧会に並々ならぬ関心を寄せ、ブリュッセル博にフーヴァーを送ったよう

に、モスクワでの開会式に副大統領ニクソン (Richard M. Nixon) の派遣を決定した。大統領は二月一〇日の実業人との懇談では、いかにも彼らしい言辞でその意義を訴えた。「今夏のモスクワ博覧会は鉄のカーテンの亀裂である。博覧会は、アメリカの真実について、六週間以上にわたり、約三五〇万のソヴェト市民に直接到達すること可能にする。われわれは直接、アメリカ人の思考、膨大な量の消費物資、文化と芸術をアメリカ人スタッフによって、ソヴェト市民にもたらしうることができる。もしこれを成功裏に実施することができれば、博覧会は国際理解をめぐる闘争で真の突破口、ある種の“Dデイ”となり得る。……私は、われわれが費やすドルは、およそ最善のドルであると深く信じている。それは建設的なドルである。武器に使われる実りのない、不毛なドルではない。これは相互理解に向かう大いなる歩みとなり得る。」²⁸⁾

大統領は六月二九日に、開会直前のニューヨークのソヴェト博覧会場を急遽訪れて視察し、この種の催しに対する大きな関心を披露した。

重要なことにアメリカ政府は、ブリュッセル博に倣い、ロシア語に堪能な若いガイド七五名を約一〇〇〇名の全米の応募者から選抜し、モスクワの博覧会に送った。彼らの多くはロシア革命後にアメリカに渡ったロシア系移民の二世であった。アイゼンハワーは六月一五日、四名の黒人を含むガイドをホワイトハウスに招き、激励した。

「君たちは今後数週間、鉄のカーテンの国の真ん中において、モスクワ博覧会でアメリカを展示する。……私は長い間、いわゆる民衆計画に関心をもってきた。……もし君たちが博覧会への訪問者に話しかけ、訪問者に対して友好と親善の気持ちをもっていることを見せ、自分の仕事を快活、愉快にやるならば、……大きな貢献をすると思う。」²⁹⁾

この同じ日の六月一五日、国務省は省内に文化交流を担当する国際文化関係局の設置とモスクワ大使館に共産主義国の中では初めて、文化問題担当の参事官職の新設を発表した。³⁰⁾

アイゼンハワー政権は博覧会に三六〇万ドルの支出を決め、工業・機械よりも、消費生活に力点を置く展示方針

を採択した。会場のソコルニキー公園には、まずジオデシックドームを建て、ここに情報センター、RAMACコンピュータなどが入った。このドームの回りに八つの展示場を設け、アメリカの労働、農業、公衆衛生・医学、教育、宇宙開発、原子力の平和利用、プラスチック、科学をテーマに展示品を用意した。このジオデシックドームの背後に、ガラスとアルミニウムからなるパビリオンを建設し、ここにはとくに衣服、スポーツ用品、食料など消費物資、二万冊の書籍と新聞、楽器、モデル台所、カラーテレビ、住宅を展示した。三番目の主要な建築にはサーカラマが入った。この他に、モデル住宅、自動車、トラック、トレーラー、農業機械、芝刈り機、投票機械、「家族」写真展の展示会場を設置した。博覧会の開催にあわせて、バーンスタイン (Leonard Bernstein) 指揮のニューヨーク・フィルハーモニック・オーケストラが公演でソ連国内を回り、人気の「エド・サリヴァン・ショウ」がモスクワで番組の収録をおこなった。⁽³¹⁾

七月二四日の開会式にはニクソン副大統領が出席した。彼はフルシチョフと共に会場を視察し、その途中、モデル台所の前で、資本主義と社会主義の比較優位をめぐり、いわゆる「台所論争」を展開した。アメリカとソ連のどちらがより魅力的な生活様式を提供できるのかを争ったこの論争は、将来の冷戦の行方にとって示唆的であった。米ソの優位を証明する分野は、軍事というよりも経済と文化にあることを示したからであった。⁽³²⁾

開会から一週間後の七月三十一日、トンブソン大使はハーター國務長官に報告書を送り、ソヴィエト市民の熱狂的な反応と会場の混乱を説明した。

下見の夜、注意深い監督にもかかわらず多くの本が消えた。それ以来、人の流れの整理、ガードレールの設置と警備員の追加により、紛失はごく僅かである。……記念品に対する驚くべき渴望が毎日、建物の深刻な損傷を生んでいる。群衆の整理が重要な問題である。入場券の販売は一日五万枚に限定されているが、当方の推

量では実際には七万枚に達している。ペプシコーラは水曜日にはフル稼働に至らず八万四〇〇〇杯を配布し、これが今日には一〇万杯に達すると見込んでいる。昨日はドームで一五の催しがあり、それぞれ五〇〇〇名の観客を数えた。自動車のパンフレットを求める喧噪はあまりに激しく、配布がおこなわれる時には何時でもほとんど騒動が起きている。パンフレットが地面に落ちていたことはなく、この安全な配布の問題に悩んでいる。二つの主要な建物のセメントの床が、激しい往来で完全に崩壊した。埃があまりにひどく、RAMACを閉鎖することが必要であったが、マツカランは一夜でアスファルトの道を整えた。……増え続ける群衆は頻繁に危険な状況をつくっているが、人員の区域ごとの配置で、これは現在うまく対処している。大きな事故は起きていない。……私は、あらゆる展示でロシア人観客が見せる情報に対する明らかな渴望を誇張することはできない。多くの人々は重機械や科学の展示が少ないことに失望しながらも、展示品の衝撃は巨大なものがある。スタッフは誰もが毎日のように危機が何度も起きる中、七日間長時間にわたって働いている。モスクワから一〇〇マイル以内の人は皆来たがっている。第二週目も入場の上限が五万名である。しかし私はこの土曜日、日曜日の来場者数は七万五〇〇〇名は下らないと予期している。⁽³³⁾

六週間で総計二七〇万人の入場者を数えたこの博覧会がどの程度アイゼンハワー政権のもくろみを達成したのか、判断するのは難しい。たとえばフルシチョフは、アメリカ博の展示品を「小道具」と形容し、「ソヴィエト人民を誘惑する」試みは「完全に失敗した」と断言した。彼は後に、「ソヴィエト人民を資本主義に向かうように誘惑するどんな試みも失敗するだろう」と力説したのである。⁽³⁴⁾

これに対して、当然のことながら、アメリカ側の評価は前向きであった。諮問委員会のメンバーで、開会式出席したワトソン (Arthur K. Watson) ICBM世界貿易会長は七月末に、全体的な印象は「見事」であり、博覧会

は「大成功」であると述べた。同様に、ニクソン副大統領も、ソヴィエト市民の博覧会に対する「大いなる好奇心と友好的な関心、……好意的な反応」を指摘した。在モスクワ大使館のフリーアズ (Edward L. Freese) はユーモアあるエピソード——あるソヴィエト市民がソコルニキー会場に、「もしこれがアメリカの生活様式を再現したものであるならば、私達が追いつくべき生活様式である」とのメッセージを残した時、そこに別の市民が、「あなたを通り過ぎる時に、どうか私をアメリカで降ろして下さい」と書き加えた——を紹介し、ソヴィエト市民の反応の一端を伝えた。⁽³⁵⁾

とりわけ好評を得たのが、ロシア語に堪能なアメリカ人ガイドであった。合衆国広報庁のホワイト (Ralph K. White) はこれらのガイドを「権威主義的な共産主義者からみて、最も破壊的な思想の種」であると述べ、彼らこそが博覧会の「最も重要で成功した要因」であると高く評価した。アメリカ大使館の文化担当参事官のブラディ (Leslie S. Brady) は、一人の黒人ガイドが経験した不愉快なケースを織り交ぜながら、若いガイド達を称賛した。「およそ八〇名のガイドはおそらく、博覧会の主な魅力であり、鉄のカーテンに穴を開ける(傍点は筆者)上での彼らの貢献を誇張することはできない。ソヴィエト市民はおそらく、彼らの言語で物事を議論するこれほど多くのアメリカ人に遭遇したことはないであろう。この事実だけで、ガイド達をして、観客の好奇心と政府の意を受けたアジの重要な標的とした。ガイド達の多くはその仕事中に何度となく、相当ひどい野次と意地悪なからかいにさらされた。四名の黒人ガイドの一人は、たとえば、ソヴィエトの群衆に「さて、おまえが英語を話すのはわかった。でもおまえの本当の言語は何だ?」と聞かれた。そのような挑発にかかわらず、すべてのガイドはとても立派な態度を維持し、大変な環境のもとで有能に務めた。⁽³⁶⁾」

五八年の文化交流協定以来、この分野に関係してきた合衆国広報庁のタッチ (Hans Tuch) も同意見であった。「私の考えでは、博覧会の全体としての成功は……ソ連で初めてアメリカ人とロシア人との間で対話があったという

事実である。普段、ロシア人はアメリカで起きていることについてはただ一つの見解、つまりソヴィエトの見解を知るだけである。」しかしながら、アメリカ博はソヴィエト市民に「初めて、事態のもう一つの見解が提示されるユニークな場」を与えることになった。ガイド達は「知的で、魅力的で、博識の若者であり、単にモノを陳列する以上に、アメリカ人の生活様式³⁷が何を意味するかをソヴィエトの来訪者に伝達することができた。」

全体に、アメリカ政府の評価は高かった。国務省は博覧会の開催を「相当の成功」と述べ、ロシア人の反応を「熱心な興味と全体的に是認」のそれであり、ソヴィエトの訪問者は「博覧会の展示品のみならず、アメリカの生活のあらゆる側面に大きな好奇心を示した」と報告した。大統領自身、一九六〇年一月の一般教書演説で、アメリカ博を「大変成功であった」とほめたたえた。NSC六〇一三は、博覧会が「共産主義国でアメリカがおこなった、最大の、そしておそらくは最も生産的な心理作戦の試みであった」と結論づけたのである。³⁸

ソヴィエト政府が以降、アメリカ博のような大規模な博覧会の開催に同意を与えなかったことは、この種の催しの影響を憂慮したことを示唆していた。この消極さはおそらく、ニューヨークのソ連博が一〇〇万人以上の観客を引きつけたにもかかわらず、アメリカ博でソヴィエト人が見せたような熱狂的な反応を引き出すことがなかった事実によっても、強まったであろう。ソ連は文化交流協定の延期交渉では、展覧会の規定そのものの削除を目指した。しかしアメリカ政府は反対し、その後、小規模ながら幾多の展覧会の開催に成功したのである。³⁹

八 人的・文化的交流の深化、拡大と封じ込め

アメリカ博は、アイゼンハワー政権内で支配的な想定——国際緊張の緩和はソ連の対外世界に対する警戒を緩め、かくて西側文化の浸透を容易にし、ゆくゆくはソヴィエト体制の好ましい「進化」を招来する——の妥当性を確認したようであった。ニクソン副大統領は八月五日、大統領への帰国報告で、「ロシア問題に対する唯一の答は

接触を通じた門戸の段階的開放である。人々は対外世界のニュースに飢えている」と語り、東西交流の適切さを指摘した。

東西交流はむろん、ソ連との間だけではなかった。七月二日のOCB報告は、東ヨーロッパ諸国では「表面的な安定さは維持、あるいは回復されたが、……スターリン時代よりもはるかに充満した変化と騒乱の雰囲気は、おそらくしばらく続くであろう。この雰囲気はアメリカと西ヨーロッパの国々に、なおも限られてはいるものの、新たな機会、すなわち旅行者の往来、文化交流、技術・通商関係の訪問者の交流を含む経済関係といった領域での私的、公的な活動の拡大を通して、東ヨーロッパの政権に影響を与える機会を提供している」と述べ、東欧諸国との交流の拡充がアメリカにとって好ましい結果を生むと指摘した。この文書はさらに、アメリカは「現在の政権への人民の圧力を維持、形成し、ソヴィエトの支配からの独立に向けての進化を加速するために、被支配国の人民との直接の接触を拡大するべきである」と主張し、NSC五六〇七が論じたように、人的交流が東欧諸国のソ連からの自立をうながすという見解を再論したのである。⁴⁰⁾

この観点から、モスクワからの帰途、ポーランドに立ち寄ったニクソンの訪問は大成功であった。ニクソンはポーランド政府首脳との会談を踏まえ、この国を「ソヴィエト体制の真のアキレス腱」と的確に評価し、ビーム(Jacob Beam) 駐ポーランド大使は副大統領の訪問が「ポーランド人に非常に大きな士気の高まり」をもたらし、「訪問の目的は十分に達成され、それは期待以上であった」と称賛した。ニクソンに同行した大統領の弟のミルトン・アイゼンハワー(Milton Eisenhower)も一行が「熱烈な歓迎」を受け、「ポーランド国民がアメリカ国民に対して友好的な感情を持っていることに、何ら疑いはない」と言明し、やはりポーランドを「おそらく社会主義陣営の『アキレス腱』」と形容したのである。アメリカはポーランドと文化交流協定を結んでいなかったが、当時アメリカ最大の資産を誇るフォード財団、第二位のロックフェラー財団が文化交流を後援し、アイゼンハワー政権は質

易の拡充に積極的であった。⁽⁴¹⁾

八月五日のNSC五九〇六／一「基本的な国家安全保障政策」は従来の外交戦略を復唱した。この文書はNSC五六〇二／一に倣い、文化・教育交流計画をアメリカの対外政策の「非常に重要な要素」と位置づけ、「ソヴィエト体制の進化的変化を奨励する」ことを再論した。そしてNSC五九〇六／一は新たに、「これらの計画において、文民、軍の指導者に、とりわけアメリカを訪れる、あるいはアメリカで教育を受けている人々に対して、アメリカの価値、動機、そして政策についてさらなる理解と評価を得るように影響を与える一層の努力を払うべきである」と主張し、東西の人的交流の推進を求めたのである。⁽⁴²⁾

大統領も翌日、訪ソしたばかりのジャーナリストのカズンズ（Norman Cousins）に会った時、「ソ連国内の士気は高いようであり、蜂起の希望は根拠がない」ことを認めながらも、「ソヴィエト政府は人民がより良い生活をあげたがり、トマス・ペインやルソーを読むことができるようになるにつれ、折れることを余儀なくされるであろうと、私は希望している。ソヴィエトの権力が拡散するにともない、ソヴィエトが分別を見せるようになることを確信できる。……自分とダレス国務長官はソヴィエト内では進化的過程が働いており、これが究極的にはソヴィエトの性質を変えるに違いないという点で同意見であった」と言明し、継続的な対ソ交流がソ連社会に与える好影響を説いた。⁽⁴³⁾

アイゼンハワー政権にとって、NSC五九〇六／一が新たにあげた狙いの実行は、すぐにやってきた。フルシチョフがソ連政府の最高首脳としては初めて、九月末に訪米する予定だからであった。約二週間の滞米中、フルシチョフは夫人と共に、首都のワシントン、大統領の山荘があるキャンプ・デーヴィッド、ニューヨーク、ロサンジェルス・デイズニールランド観光を含む一、デモイ（アイオワ州）、そしてピッツバーグを訪れ、政財界の要人との会談はもちろん、一般国民との交流をおこなったのである。⁽⁴⁴⁾

国務省が首脳会談に備え、大統領に提案した議題の一つが米ソ交流であった。アイゼンハワーはさっそく、第一回目の首脳会談の席上、「わが国はソ連に一万五〇〇〇名の観光客を送っているのに、ソヴェエト市民はわずかに一〇〇名が来ているに過ぎない」と不平を述べ、交流の拡大を提案した。フルシチョフもこの提案に前向きであった。両首脳は会談で「科学、技術、文化交流の拡大への支持」を表明し、共同コミュニケはこの分野で「重要な進展」があったとうたい、「何らかの協定」がじきに結ばれると宣言したのである。首脳会談はその他フルシチョフによるベルリン問題の最後通牒の取り下げ、大統領の訪ソの招待以外にとくに具体的成果はなく、ドイツ、軍縮をめぐる進展はなかった。⁽⁴⁵⁾

しかしアメリカにとって、この訪問の意義はフルシチョフの対米観に与えた影響であった。というのは、かねてフルシチョフは西側要人との会見を通じ、西側に対する粗野な威嚇を交えた教条的な主張、常套句を繰り返していたからである。たとえばこの年の六月、米ソ関係に長く携わってきたハリマン (W. Averell Harriman) 元駐ソ大使が訪問した時、フルシチョフは「西側はソ連の数発のミサイルが全ヨーロッパを破壊できることを忘れていた。一発の爆弾はボンの破壊に、三発から五発がフランス、イギリス、スペインとイタリアの破壊に充分である。……アメリカのミサイルは僅かに一〇キログラムの弾頭を運ぶことができるのに対して、ソ連のミサイルは一三〇キログラムの弾頭を運ぶことができる。このような状況で、ソ連を脅すことは非現実的である。」⁽⁴⁶⁾と言いつつ、さらに彼は、「五年から七年以内に、われわれはあなたの方より強くなるであろう。……もしわれわれが今後五、六年間に、弾道弾に三〇〇億ルーブルを費やすならば、アメリカとヨーロッパのあらゆる産業中枢部を破壊できよう。三〇〇億ルーブルはわれわれには大した額ではない」と豪語した。ハリマンはこれらの主張を受け流した後、むしろソ連側がアメリカの経済成長率を二%と予測していることに「驚き」を表明し、この数字を四%、あるいは四・五%に上げるように求めた。しかしフルシチョフはまったくあわなかつたのである。⁽⁴⁶⁾

トンプソン大使はこの会見で「非常に驚愕する展開」は、フルシチョフが「西側全般、とくにアメリカの事情に充分通じておらず、衝突の重大な危険を伴うドイツ政策を奉じているようであることだ」と憂慮し、フルシチョフの「危険な政策」を警告した。モスクワで「台所論争」を展開したニクソンも、フルシチョフが「閉ざされた心の持ち主」で、「アメリカで目にするものに印象づけられない」と心配した。⁽⁴⁷⁾

しかし、トンプソンやニクソンの警告とは裏腹に、アメリカでの体験はフルシチョフに好ましい影響を与えたようであった。全米を回ったフルシチョフに付き添ったロッジ（Henry Cabot Lodge, Jr.）国連大使はハーター国務長官に、フルシチョフが「われわれの高い生活水準を称賛し、資本主義はアメリカでもっとも良く機能していると言明した」と書き送った。ロッジはさらに、フルシチョフが「自分はアメリカが世界で最高の生活水準と最も能率的な生産方法を持っていることを否定したことはない」と語ったと報告した。そして彼の印象では、フルシチョフは「ソ連がアメリカに一九七〇年までに追いつくことができるとは考えていない。総生産では追いつくことができるかもしれないが、一人当たりの生産に関する限り、追いつくことはできないと考えている」というものであった。

ロッジは結論として、「この時点で、今回の訪問の成果は明らかに損失を上回っており、私はこれを多くの様々な点で実証できる」と自信を示し、フルシチョフの訪米の成果をほぼ手放しで評価した。したがってロッジのフルシチョフ観はニクソンのそれとは異なり、好意的であった。「フルシチョフは共産主義的『宗教』に対してではないにせよ、ある問題について偏見はない。彼は非常に上手な、注意深い聞き手である。……フルシチョフはアメリカで見たことに深い印象を受け、……わが国の国民の活気に驚いたであろう。フルシチョフはソ連が少なくとも近いうちにアメリカを追い越すことができるとは、おそらく本当には考えていないであろう。」⁽⁴⁸⁾

国務省の判断も同様に楽観的であった。「フルシチョフが以前にアメリカについては、映画や広範な読書などからすべてをすでに知っていると言明したにもかかわらず、わが国の生産能力、高い生活水準、国民の団結などが彼

に印象を与えたと信ずるあらゆる理由がある。」フルシチョフは「おそらく」、ソ連の経済学者が自国経済の成長について言っていることを信じているであろうが、「ソ連のアメリカよりも高い経済成長率をもってしても、ソ連が生活水準でアメリカに追いつくには相当の時間がかかるという確信をもって帰国したのである。」⁽⁴⁹⁾

興味深いことは、フルシチョフがアメリカ旅行を楽しみ、滞在中の厚遇を率直に喜んだことであった。トンプソン大使によると、フルシチョフは訪米に「とても満足し、とくにアメリカ国民と政府指導者、さらには大統領と彼の家族が示した友好的な感情は彼の期待を越えるものであった。彼は旅行について、非常に愉快的記憶を有している」のであった。フルシチョフは別の機会にも大使に、「アイゼンハワーの「人柄にまったく圧倒された」と語り、大統領に対する「大いなる敬意と友情」を表明した。彼はさらに、「ソ連は来るべき大統領選挙について意見を聞かれていないが、もし機会を与えられたら、アイゼンハワーに投票するであろう」とさえ言明し、大統領がもう一期務めることができるならば、「われわれの問題は解決されると確信している」と述べ、米ソ関係の先行きに明るい展望を示したのである。⁽⁵⁰⁾

アメリカにとって重要であったのは、フルシチョフの対米観に与えた肯定的な影響だけではなかった。彼の帰国後、ソ連政府は、合衆国広報庁によるラジオ放送「アメリカの声」(VOA)に対する妨害を減らし、一九六〇年春までにソ連では、この放送をほぼ支障なく聞くことが可能になった。一九六〇年二月の在モスクワ大使館の報告では、多くのソヴェイト市民が自由にこの放送を聞いていた。NSC六〇一三が、ソ連国内に対するアメリカの情報流入は、先のアメリカ博の開催と相まって、「鉄のカーテンの向こうの人々に事実を知らしめる試みの上で一里塚を形成する」と歓迎したように、これはアメリカにとって非常に好ましい展開であった。⁽⁵¹⁾

さらにフルシチョフの訪米は一九五九年一月までに、二回目の文化交流協定調印につながった。米ソの交渉は十一月四日にモスクワで始まり、早くも二一日には協定の締結に至った。今回の新しい米ソ科学・技術・教育・文

文化交流協定は、基本的には五八年一月の協定の延長であったが、原子力と経済の分野での交流が新たに加わり、各分野での交流の拡大があった。注目するべきことに、両国は一九六〇―六一年に少なくとも三回の展覧会を開催することで合意した。アメリカはこの展覧会にアメリカ人ガイドをつけ、ソ連各地で開催する考えであった。⁽⁵²⁾

最後に、フルシチョフの訪米は中ソの対立を促進したようであった。一九五九年一月一日のNSCの会合で、ダレスCIA長官は、中華人民共和国の建国一〇周年の記念式典に出席したフルシチョフの演説は、中国では「おそらく好意的に受け止められなかったであろう」と解説し、中国側の米ソ共同コミュニケに賛同する声明は「おそらく無理に強いられたものだ」と言明した。U型偵察機の産みの親であるビッセル (Richard Bissell) CIA副長官は一二月半ば、アイゼンハワー大統領の最近のインドなどアジア諸国歴訪に関する中ソの論評の違いをあげ、中ソ間の「見解の相違のさらなる証拠」を指摘し、中ソの緊張は「現実である」と同意した。数週間後にはトンブソン駐ソ大使より、「疑いもなく、共産圏のもっとも深刻な問題はソ連と共産中国の関係である。私は、両国の相違が大きく、長期的にはおそらく、改善するというより悪化すると確信している」と記した報告書が到着した。大統領自身、一九六〇年一月の日本の岸信介首相との会談で、米ソ関係の展望に「以前よりは少しばかり希望をもっている」と述べる一方で、フルシチョフは「強力な赤色中国の挑戦」を恐れているのではないかと推測し、中ソの微妙な関係を指摘したのである。⁽⁵³⁾

これらの見解は間違っていないなかった。フルシチョフの訪米と米ソ関係の改善は確かに、中ソ同盟の最終的崩壊に向かう重要な要因だからであった。⁽⁵⁴⁾

明らかにこの年、ソ連との人的・文化的交流は新たな段階に入っていた。フルシチョフの他に、ニコヤン (Anastas I. Mikoyan)、コスロフ (Frol R. Kozlov) 両副首相が訪米し――後者はニューヨークのソ連博の開会式に出席した――、アメリカからはニクソン副大統領、農務長官、原子力委員長、ウォーレン (Earl Warren) 最高裁首席判

事、九州の知事をはじめ、ハリマン元駐ソ大使が訪ソした。今や政府高官、重要な関係者の相互訪問は常態化したようであった。そしてむろん一九六〇年春にはアイゼンハワーがアメリカの大統領として初めて、モスクワを歴訪する予定であった。⁽⁵⁵⁾

人的交流ではさらに画期的なことが起きていた。一九五八年の協定にもとづき、アメリカの二二名の学生がソ連で、ソ連の一八名の学生がアメリカの大学で学んでいたからである。国務省の報告によると、これは「米ソ交流の真の転機」であり、ソ連にとって、「自由世界の国とのこの種の交流としてはもつとも大きな」もので、ソ連の学生が「海外に行く最初のこと」であった。かねて大量の留学生をソ連から受け入れることに積極的であった大統領は五月二日のNSCの会合で、「ロシア人民に対する突破口をつくる何らかの手段」を見つける必要を訴えた。なぜなら、「われわれは軍事的な抑止能力に過度に依存しており、わが国の膨大な軍事予算は経済の拡張を可能にしているのではなく、実際には弱体化させている。他方で、ロシアの学生に対する僅かばかりの費用は大した額にはならず、しかし成果を非常に期待できる」からであった。アイゼンハワーは再び、軍事的側面に傾斜する封じ込めを槍玉にあげ、この種の人的交流の意義を強調したのである。⁽⁵⁶⁾

観光も順調であった。一九五九年のソヴィエトの西側世界への観光客は三万名以上におよび、アメリカには約四〇〇名がやってきた。一方、ソ連を訪れたアメリカ人は五八年の五〇〇〇名から二倍以上の一万一〇〇〇名に達した。これらの人的交流を積極的に進めるアメリカ側には、むろんソヴィエト体制の長期的な変化を促す期待があった。一九五九年一〇月の国務省の情報・調査局の報告書がこの点を浮き彫りにした。「スターリンの死後、ソ連は自由世界諸国との交流をほとんどゼロから、現在は総計で二〇〇〇〇の代表団交流と毎年ソ連を訪れる七万五〇〇〇名の観光客にまで拡大した。…自由世界との接触の増大はソ連指導部上層や知識人に新鮮な考えを導入し、対外世界に関するソヴィエトのイメージを現実により近いものにしてている」⁽⁵⁷⁾

この頃までに封じ込めの手段として、人的・文化的交流が明らかな重要性を帯びて、登場した感があった。だがアイゼンハワー政権は、この領域での成果をアメリカ国民に声高に喧伝することはできなかった。ソ連の警戒を招いて、計画の縮小につながる危険があったためであった。しかもその成果は長期的に期待できることであり、すぐに具体的な形となって現れることはなかった。そこにアイゼンハワー政権のジレンマがあった。

九 ミサイル・ギャップ論争の進展

一九六〇年一月一八日の上院外交委員会で、ダレスCIA長官はソ連が一九六〇年初頭までに一〇基のICBMを獲得したであろうと証言した。国家情報評価（二月九日）は、「もしアメリカの軍事態勢が現在の計画通りに発展しても、ソヴェエトは一九六一年には、ICBMの配備の早期展開により、アメリカに対する決定的な政治的・心理的優位を獲得する最も好ましい機会を得る」と予測し、ソ連が一九六一年半ばに一四〇―二〇〇基のICBMを所有すると見積もった。これに対してアメリカのICBMは六〇年半ばで一六基（ソ連は三五基、六一年半ばで五六基に留まった。したがって依然としてアメリカはICBM戦力では劣勢と見られていた。しかし重爆撃機の分野ではトワイニング統合参謀本部議長の報告によると、米ソの所有数は一九六〇年半ばでそれぞれ五二〇機、一三五機、一九六一年半ばで五五一機、一五〇機であり、アメリカが圧倒的な優勢にたっていた。まさにアメリカは、アイゼンハワーが嘆息したように、「ICBMが働かない可能性に備え、保険を沢山払っている」状態であった。⁽⁵⁸⁾

この総合的なアメリカの軍事力に対する自信を、五九年一二月に国防長官に昇格したゲイツ（Thomas S. Gates, Jr.）が敷衍した。彼は一月七日のNSCの会合で、「今や事実上、ミサイル・ギャップは存在していない」と言い切り、一月一九日には上院軍事委員会でアメリカの軍事力の優位を強調した。「ソ連が恐るべき大国であることに疑いはない。……しかし、ソ連が軍事力でアメリカに追いついたとか、あるいは追い抜きさえしたとの一部の印象

は、事実によってまったく支えられていない。……事態を分析した者の結論は、ソヴィエトが動員可能なすべてのミサイルを使つての奇襲攻撃さえも、わが国の報復攻撃力を十分に破壊するには充分ではなく、したがって、わが国を攻撃することが合理的な決定とはなるまいということだ。」この結論は、アメリカの抑止が「長距離ミサイルのみならず、他の戦略的兵器の開発計画の引き続いての成功」や早期警戒体制の充実、ソ連軍の体制や兵器開発を察知する能力に依っている。ゲイツは局地紛争の問題にも言及し、大量報復戦略の基本通り、地上軍は同盟国に供出を仰ぐ方針を確認した。「局地侵略を防ぐ、あるいは必要であれば、それを封じ込める問題では、単一の最も重要な要素は同盟国の軍事力である。局地紛争の勃発を防ぐ最善の手段は、早急に反応できる、現地に強力で、良く装備された軍隊を持つことである。われわれはわが国の兵力の展開を補足する同盟国の兵力と資源に依存する。……軍事援助計画をつうじ、われわれは同盟国が局地侵略の脅威に対処するに必要な軍事力を形成、維持し、自由世界の集団的な力に貢献することを助けることができる。」⁽³⁹⁾

ハーター国務長官も上院外交委員会で、ソヴィエトは「今後二、三年のいわゆるミサイル・ギャップの期間」、奇襲攻撃を敢行するに十分なミサイル戦力を有すると思わないと証言し、アメリカの強い軍事的立場を復唱した。大統領も二月初旬のNSCの会合で、「軍事的な重要性が全くないスプートニクの打ち上げによりアメリカ国内では不必要なヒステリーが起きた。……われわれは現在軍事的に充分なことをしており、充分な報復能力を有していると考えている」と言明したのである。ゲイツ国防長官も三月一〇日のテレビ各社とのインタビューで、「継続的にアメリカの軍事体制を改善している」と説明し、アメリカの攻撃能力の高さを改めて強調した。⁽⁴⁰⁾

一月七日のNSCの会合では、ニクソン副大統領がミサイル・ギャップの唱道者に適切な批判を加えた。すなわち、ミサイル・ギャップ論は「ソヴィエトは実行可能なことをすべてやって、誤りをおかさないという前提にたち、なおかつわれわれは実行可能なことをやらず、多くの誤りをおかすという前提」にたつからであった。アイゼンハ

ワールは、この会議でニクソンが一九六一年半ばに、アメリカがソ連に対するミサイル戦力で「最も危険な段階」に陥るのではないかと心配した時、ソヴィエトが「一四〇―二〇〇基のミサイルを決定的と見なすとは自分は信じていない」と語り、副大統領の懸念を一蹴した。ここで興味深いのは、フルシチョフの態度であった。ロジ国連大使が二月に訪ソし、ソ連のロケット戦力の優位を言った時、フルシチョフはそれを否定する次のような返答をおこなったからである。「いいえ、われわれはそうでない。実際にはそうではない。⁽⁶¹⁾」

アイゼンハワーが一月一八日に議会に送った一九六一年度の予算教書で要請した国防費は前年度並みの四一〇億ドルであった。大統領の判断では、これ以上の軍事費はアメリカの「安全を強めるのではなく、むしろ弱める」ものであった。ゲイツ国防長官もこの予算規模に「満足」であった。相互安全保障計画にもとづく対外軍事・経済援助の要請は四〇億七六〇〇万ドルであった。この数字は前年よりも一億ドル多かったが、それでも六〇年度と並び戦後で最も低い水準であった。この背景の一つには、アメリカの国際収支の悪化があった。とくに貿易黒字は一九五九年に急速に収縮し、黒字幅はわずか一〇億ドルに落ち込んでしまった。アイゼンハワーの批判の標的は、依然としてアメリカの駐留軍に依存する西欧同盟諸国であった。彼はヨーロッパ諸国が「アメリカにあまりに寄りかかっている」ことに「非常に苛立っている」と語り、「一九五一年にヨーロッパに米軍を派遣した時、それは一時的なものであった。…フランス、ドイツ、イギリスはすべて金準備高を着実に増やしている。彼らの予算は過度な負担がかかっている。一九五一、五二年にわれわれは犠牲を払った。何故彼らは公正な負担を担わないのか、わからない」と不満を漏らしたのである。⁽⁶²⁾

ソ連との間では軍事的抑止が成立した以上、国防予算増の軍事的意味が乏しく、また対外援助の増額が難しい状況のなかで、アイゼンハワー政権がソヴィエト体制の「進化」を促す有力な手段として推進したのが人的・文化的交流であった。トンプソン駐ソ大使は一月二九日に次のような報告書を送り、この点を強く主張した。「文化的・技

術的接触の始まり、わが国の放送の妨害の減少、海外ニュースの刊行物の増加は外国の見解に関する知識の増大と相まって、すでに重要な影響を及ぼしており、この状況が長く続けば続くほど、ソヴィエト政権にとってその政策を逆戻りさせることを難しくする。……どんな社会においても、変化を求める不可避的圧力は不満をもつ人間の欲求のみならず、他の解決不能な問題によって引き起こされる。」大使は、フルシチョフが「すでに導入した変化が成功するならば、やがて、ソヴィエト内における普通の社会へとつながるさらなる変化を助長することになるであろう」と観察し、「この進化の速度を測ること」は難しいものの、それは「急速に進んでおり、それはフルシチョフが六五歳であり、先を急いでいる人物であるという事実」に部分的に起因する」と解説した。したがってトンプソンの結論は、「アメリカの健全な政策」とは「この進化を実行可能なあらゆる方法で促進すること」であった。⁽⁶³⁾

ダレスCIA長官はこの報告を見るや、マーチャント (Livingston T. Merchant) 国務次官に対して、「ソヴィエト内と指導部の進化的変化を取り扱っている」部分を設置されたばかりの海外広報活動大統領委員会に伝えるように勧告した。東西交流を担当するレイシー大使も、米ソ交流の成果の一つは「ソヴィエトの世論に好ましい影響を与え、ソヴィエト内の変化を求める諸勢力を助長する」ことであると説明した。一九三〇年代からソ連を観察してきたポーレン国務長官特別補佐官は、進化の過程がソヴィエト体制とその外交に「根本的な影響」を与えるには「少なくとも一〇年」はかかるであろうと考え、トンプソン大使ほどには先行きを楽観しなかったものの、それでもハーターに、「長期的には、ソ連内での進化の経過はわが国にとって有利な方向へと働くであろう」と説明したのである。⁽⁶⁴⁾

国務省の情報報告はこれらの見解を確認した。「ソヴィエトの交流計画が増大し、次第に安定してきた期間にあつて、ソヴィエト内の最も直接的な政治的影響は、ソヴィエトの経験では前例のない規模で、海外に旅行し、外国の訪問客を受け入れた指導者達による対外的な接触によって生み出されている。この接触はソ連指導者に対外世界

とソヴィエトの政策に対する外国の反応に関する全貌を提示している。……一般の市民は対外世界の広範な知識によって利益を受けている。……よく事情に通じた大衆の存在により、ソ連当局が恣意的で不人気な行動を隠蔽することを難しくし、かくてその政策に対するある制限を科すことになる。たとえば、西側の生活水準の知識は、大衆のより良い消費物資と住宅に対する欲求を刺激する上で、重要な役割を果たしている。⁽⁶⁵⁾

したがってアイゼンハワー大統領は従来への封じ込めが十分な成果をあげ、着実にソヴィエト体制の「進化」を促していると判断した。彼は二月初旬のNSCの会合で、ソ連が急進的な行動をとる危険について過大な評価を戒め、ソヴィエト体制の究極的な変容を予言したのである。「国家は豊かになるにつれ、より保守的になる。おそらく工業化がソ連で進展し、ソヴィエトが冒険的な政策によってより大きな危険を有するにつれ、より保守的になる。……もう五〇年もたつと、米ソ関係に大きな変化が生ずるであろう。」ダレスCIA長官も同感であった。彼は、「ソヴィエト内での進化的展開の可能性を常に信じてきた」と言明し、国家情報評価「世界情勢の評価」（一月一九日）の次の一部を読み上げた。「より良い生活を求める大衆の希望がソヴィエト内で増大している。国内では、諸制限からの個人的自由の拡大を求める層が存在し、ソヴィエトの成長の経済的果実の増大の享受を求める幅広い欲求がある。」ニクソンも、「ソ連は危険をおかすものが多くになるにつれ、より抑制されよう」と述べ、ソヴィエト体制の変容に期待を表明した。⁽⁶⁶⁾

しかし冷戦の軍事的側面に焦点を絞ったミサイル・ギャップ論争は止むことはなく、アイゼンハワー政権の政策は党派的な攻撃の対象であり続けた。一月には、政府の国防政策を一貫して批判してきた有力なジャーナリストのオルソップ (Joseph Alsop) が五回連載の新聞コラムで、ソ連がすでに少なくとも一五〇基のICBMを獲得し、アメリカの核戦力を容易に破壊できると警告した。上院院内総務のジョンソン (Lyndon B. Johnson) 民主党上院議員は二月、アメリカが「拡大する」ソ連のICBM能力に対抗するだけ充分早くミサイル計画を進めているのかと

疑問を投げかけ、サイミントン上院議員もソ連のICBM保有量は一年前の予測よりも大きなものと断じ、政府の「誤った情報」を攻撃した。サイミントンの情報によると、ミサイル・ギャップの期間、ソ連のICBMはアメリカのその三倍以上に及ぶものであった。同じ頃、上院外交委員会のチャーチ (Frank Church) 民主党上院議員は、アメリカがソ連と「死闘」を展開しており、ソ連が「過去一五年間に世界の三分の一を獲得した」と指摘し、その脅威の増大に警鐘を鳴らしたのである。二月に発表されたギャップ世論調査によると、ミサイル・ロケット開発競争に関する質問で、アメリカがリードと答えた者は三三％に留まり、ソ連と答えた者は四七％にのぼっていた。⁽⁶⁷⁾

明らかにミサイル・ギャップ論争はアイゼンハワー政権に影響を与えた。大統領は二月九日の議会指導者との会合で、ミサイル・ギャップ論の主張者を念頭に、「彼らの中には、国家安全保障をまったく顧慮することなく、アメリカを慌てさせることを生業にしている者がいる」と嫌悪感を露にしながらも、ミサイル戦力のさらなる強化に踏み切るからであった。彼は四月一日のNSCの会合で、ダグラス (James Douglas II) 国防副長官が新型ICBMのミニットマンの一五〇基の製造を提案した時、「品物も見ないで買物をする」愚かさをこぼしつつ、この提案をしぶしぶ承諾したのである。ダグラスによると、ミニットマンをあわせると、アメリカは一九六三年半ばまでに約五〇〇基の長距離ミサイルを獲得する計画であった。これで、アメリカ政府が恐れたソ連とのミサイル・ギャップは完全に解消する見通しであった。⁽⁶⁸⁾

さらにアイゼンハワーの六月に予定された訪ソ、期待される米ソの一層の緊張緩和は、民主党の批判に対する有力な反論材料になるはずであった。

十 U二機事件と封じ込めの行方

フルシチョフはアイゼンハワーの訪問を待ち望んでいるようであった。彼は二月に会ったロッジ国連大使に、大統領は軍事基地を含む「ソ連国内のどこでも自由に旅行できる」と約束し、ソ連の対応は「最大限友好的であり、大統領の身辺上の警戒の必要はない」と保障した。ソ連側が対米関係の先行きに楽観的なことは、キューバに対するアメリカの軍事干渉を否定したことから明らかであった。ソ連共産党中央委員会は三月、「情勢の難しさと緊張の増大にかかわらず、アメリカは今日、国際関係の有利な展開をはかる措置に限ることに満足しており、どのような状況であれ、一線を越えてキューバに対する公然の干渉を企てることはない」と分析したのである。⁽⁶⁹⁾

しかし五月一日にソ連が上空を飛行中のU二型偵察機をミサイルによって撃墜した事件は、一気に米ソ関係を暗転させた。当初フルシチョフはこの偵察はCIAの指示によるもので、大統領は直接関与していないと考えていたようであった。しかし極秘飛行の責任を認めたアイゼンハワーに信頼を裏切られたと感じたフルシチョフは、大統領の訪ソ招請を取り消して謝罪を要求し、激しい大統領非難に転じたのである。ソ連は五月のパリ四大国首脳会談を流産させ、七月一日にはバレンツ海上で米軍用機を撃墜した。秋の国連総会に出席したフルシチョフの一連の行動——マクミラン英首相の演説には靴をもって机を叩き、ハマースホルド(Dag Hammarskjöld)国連事務総長の演説に対しては、拳で机を叩く様子——は国際社会に異様な衝撃を与えた。彼はまた、国連総会出席のためニューヨークのハーレムに滞在中のカストロ(Fidel Castro)キューバ首相を訪ね、懇談した。フルシチョフの行動は確かにハーターが事前に予測したように、「国連総会を壮観な宣伝サーカス」と転化させた感があった。九月のトンブソン大使の報告によると、ソ連首相は「現在のアメリカの政権の残任期に米ソ関係の問題を解決する可能性はないと確信した」と語り、米ソ関係の改善を当分あきらめたようであった。⁽⁷⁰⁾

ところがアイゼンハワー政権にとって幸運であったことに、フルシチョフは文化交流については、別個の問題と考えていたのである。国務省は、ソヴィエト政府は「自由世界との交流計画のペースを緩めようとはしていない」と観察し、この事態を歓迎した。トンプソン大使は六月四日、ピアニストのクライバーンを迎えた「昨晩の夕食会で、ソヴィエトの文化担当の役人は非常に礼儀正しく、政治的話題を注意深く避けた。一般的にいつて、米ソの接触の反応は友好的なそれである」と報告した。翌月のクライバーンの歓迎昼食会でも、ジューコフ (Gorb. Zhukov) 文化相、ピアニストのゲレリス (Emil Gilels) らは、アメリカ側に「文化関係の分野で緊張の増大はないことを強調した」のである。⁽¹⁾

七月一八日、在モスクワ大使館のフリーアズは、U二機事件を契機に米ソの政治関係が「深刻に損なわれている」この時期に、アメリカ文化が「逆説的ではあるが、ソ連の広い地域に広まり、批評家レベル、一般大衆レベルで非常な成功を収めている」と観察した。ミュージカル「マイ・フェア・レディ」のモスクワ、レーニングラード、キエフ公演、ヴァイオリニストのスターンのモスクワ、レーニングラード、キエフ、オデッサ、ヴィルニウス、リガ、ミンスク、タシケント公演、オペラ歌手のピーターズ (Roberta Peters) のモスクワ、バクー、トビリシ、エレバン、レーニングラード公演は大好評であり、クライバーンは「現在、ほとんど騒動に近い人気を誇っている」と報告した。とくにクライバーンに対する称賛は「ある種の大衆ヒステリーに部分的には帰することが可能である」と説明した。その称賛は「一五歳から六五歳の女性から」やってきており、「もしクライバーンが二本の指で箸を操っても、彼の「観客」は「ヴァーニヤ」と熱烈に叫び、花束を投げかけ、彼の衣装を握りしめ、通りを追いかけ、彼のホテルの前で辛抱強く、彼が窓から親しげに手を振るのを待つ」という状態であった。ソ連生まれのスターンはロシア語を話し、ヴァイオリニストのオイストラフ (David Oistrakh) やコーガン (Leonid Kogan) 、ギリリスとの「個人的親交」をもっているという利点もあり、「大変な大衆的成功と批評家の成功」を収めていた。

フリーズは結論として、この種の計画の「継続と拡大」を勧告し、そうすることで、「アメリカの文化が実際にあるがままに、すなわち活気があって、多方面にわたり、自由で、表現力に溢れ、多才な力を持ち、それがわれわれの生活様式の一部である、と認識されるであろう」と書き送ったのである。⁽⁷²⁾

アメリカ大使館の文化担当の参事官ブラディの七月末の報告では、アメリカの映画は「相当の人気を享受して」おり、たとえばモスクワの二つの映画館で上映中のエリザベス・テラー (Elizabeth Taylor) 主演の『ラブソディ』は「熱狂的な」な反応を得ていた。その他に『ローマの休日』もモスクワで、『リリー』がヤルタ、トビリシで、『イヴのすべて』がエレバンで上映されていた。⁽⁷³⁾

しかもVOAに対する妨害はU二機事件直後は「大規模」であったが、じきに「選択的な妨害」に代わり、ソ連政府が全面的な妨害にでることはなかった。ダレスCIA長官の観察では、フルシチョフは軍事費を増やすことなく、東ドイツとの平和条約を急ぐこともなく、実際の対応は落ち着いており、「国際情勢の一層の悪化を防ぐ」意図があった。ソ連はジュネーブでの核実験の停止をめぐる協議を続け、核実験の停止を一方的に破ることはなかった。⁽⁷⁴⁾

結局、米ソ交流にとり一九六〇年は悪い年ではなかった。レイシー大使はボーレンに対して、「政治的雰囲気悪化にかかわらず、一九六〇年はソ連との実務的な接触と交流の継続によって特徴づけられた」と報告した。彼はとりわけ映画交流を「最も成功した分野の一つ」と評価し、アメリカ映画がソ連で「満足するべき暖かい反応」を得ていると記した。観光も順調で、一九六〇年にソ連を訪れたアメリカ人観光客は前年並みの一万二〇〇〇名を維持し、アメリカにやってきたソ連人観光客は少し増え、約五〇〇〇名であった。国務省の調査では、ソ連の西側世界全体との交流は前年より一二%増えていた。⁽⁷⁵⁾

アイゼンハワーが設置した海外広報活動大統領委員会は一九六〇年二月に報告書を提出した。この文書は教

育・文化交流計画には「大いなる、しかし今だ充分に利用されていない機会」があると指摘し、「国際情勢の変化」はこれらの交流計画の「とくに早急な拡大」を必要としていと主張した。とりわけソ連・東欧諸国との交流計画については、次のように勧告した。「ソヴィエトでは、……個人の自由の拡大と非共産圏との接触の拡大に対する圧力の増大がある。……わが国はソヴィエト圏の政府の敵対性と侵略性を幾らかでも減少させ、ソヴィエト圏での摩擦を増やすことを狙い、あらゆる機会をとらえ、影響、情報、そして思想をもってソヴィエト圏に浸透することが重要だ。十分な予算が、博覧会、文化展示、出版物の交流や他の広報活動の機会を十全に利用するために準備されるべきである。」⁽⁷⁶⁾

アメリカ政府は一二月に東ヨーロッパ諸国のなかで初めてルーマニアとの間で文化交流協定を締結し、この地域に重要な橋頭堡を得たのである。⁽⁷⁷⁾

この間、アメリカにとって好ましいことに、中ソ関係の悪化は続いているようであった。ポーレンは、U二機事件後のソ連の厳しい対米姿勢には、北京との問題が関係しており、「中国を出し抜くために、好戦的な路線をとっている」と観察した。この解釈にトンプソンも同感であった。ダレスCIA長官は六月のルーマニア共産党大会における中ソ対立に言及し、「合意のための方式を見いだす努力」がなされたが、「成功しなかった」と推測した。その後ソ連は七月に、中国から専門家と技術者の引き揚げを発表した。ダレスは八月一八日のNSCの会合で、過去数週間の情報収集の結果、「共産中国とソ連の間の摩擦は以前の評価よりも深刻である」と報告し、一月二八日の会合では、モスクワで開催された世界八ヶ国共産党・労働者党代表会議の席上、中国の代表に対してフルシチョフが「二度冷静さを失い」、会議後の宣言は「何も解決していない」と解説したのである。⁽⁷⁸⁾

しかしアメリカ国内では、アイゼンハワー外交に対する厳しい批判が和らぐことはなかった。むしろU二機事件とフルシチョフの高圧的な対応は、アメリカ国民の対ソ強硬路線を助長したようであった。ケネディ上院議員は六

月の上院本会議での演説で、「ソヴィエトの世界制覇計画」に対抗するにあたり国防予算の増額を含めた対策を提案した上で、「アイゼンハワー大統領は政策を有する代わりに、ロシア人に対して微笑みかけ、国務省は眉をひそめた。ニクソン氏はその両方を試みた。……フルシチョフ氏が力の均衡がソ連有利に傾いていると確信している限り、微笑も強硬さも、キャンプ・デーヴィッドも台所論争も彼を有益な交渉に向かわせることはできない」と宣言し、政府の対応を微温だとして攻撃したのである。⁽⁷⁹⁾

ケネディは七月に民主党の大統領指名を得るや、国家安全保障政策に関する作業委員会を発足させ、ニッツェ(Paul H. Nitze)をその長に指名した。ニッツェはアイゼンハワー政権の封じ込めに対する最も先鋭的な批判者として知られてきた人物で、一九五七年のゲイサー文書の主要起草者であった。一二月までにまとまった作業委員会の報告書は、「短期的な抑止ギャップの克服」と「わが国の全面戦争能力に影響を与える長期的決定」の必要を言い、アイゼンハワー政権は「わが国が限定戦争において核兵器に依存する程度の問題に、明確に対処したことはなかった。……予算上の圧力とより大きな全面戦争能力の圧力はわが国の非核軍事能力の継続的圧迫をもたらした」と批判し、新たな安全保障戦略の採用と核・通常兵力の双方の増強を提言した。そしてこの報告書は、翌年度の国防費として「おそらく三〇億ドルの増加」、「将来はさらなる増加」を要すると述べたのである。有力な民主党大統領候補であったサイミントン上院議員も九月、ケネディに次のように語り、アイゼンハワー政権の政策を痛罵した。「現政権はミサイル計画に不十分な財源と優先を付与し続けてきた。……決して明確でも健全でもない理由で、現政権は共産主義陣営がこの新たな兵器「ICBM」の生産量で少なくとも三対一のリードの獲得を許容してきた。……われわれは国防に対する資源のこの不十分な適用を矯正する早急な手段を講じなければ、世界における立場をさらに失うことを予期するだけである」⁽⁸⁰⁾。

共和党の大統領候補に指名されることが確実なニクソン副大統領も、この問題では何らかの対応をしなければなら

らないと考えていた。彼は党内のライバルで、かねて年額三五億ドルの国防費増を説き、大統領の軍事政策に批判的であったロックフェラー (Nelson A. Rockefeller) ニューヨーク州知事と七月下旬会談し、合意に達した。ここで二人は、「アメリカはわが国の防衛体制を強化するに必要な計画を充分に履行するために、軍事費の増加をしなければならず、またその増加を賄うことができる。アメリカの安全に価格の上限があつてはならない」と声明したのである。アイゼンハワーの政策の事実上の拒否であり、彼をいたく失望させる内容であつた。⁽⁸¹⁾

大統領は六〇年春、自省を込めて、国防支出増の過程を回顧した。そこには軍事費の高い伸びを唱えるケネディ、ロックフェラーらに対する非難があつた。「予算は朝鮮戦争の結果、だいたい七三〇億ドルにまで増大した。朝鮮戦争の前の国防予算は一二九億ドルの水準であつたが、今や四一〇億ドルに達した。……予算を充分に削減する前に、スプートニクがあつた……。現在振り返ると、アメリカの一部でのほとんどヒステリーといつていい状況の故に、軍事費ではたぶん少々過大なことをやった。……政策決定は決して恐怖のもとでなされるべきではない。……現在でも、国民の不興をかうことを恐れて、決定がなされることを懸念している。……国民が求めているからといつて、連邦予算を毎年増やすことは必要ではない……。……現在の八一〇億ドルの予算水準を前に、政治的影響力を有する層を宥和するために予算増をおこなうことは、国家に損害を与えていると思う。」

アイゼンハワーは最後まで大量報復戦略に固執した。前年に陸軍参謀総長を退任したばかりのテイラー (Maxwell D. Taylor) 将軍が大量報復戦略に代わつて限定戦争に備える「柔軟反応戦略」を提唱し、さらに國務省も大量報復戦略の修正を求めることでは一致していた。スミス國務次官補は一〇月一四日の省内での会合で、アメリカの通常兵力の不足に改めて危惧をもち、政府は「真正面より、その政治的コミットメントに照らし、限定戦争に充分な能力を有しているのかという問題に対処しなければならぬ」と指摘した。マーチャント次官も、中ソの「限定行動の可能性は明らかに増大している」と警告し、「侵略に対する軍事反応について多目的で柔軟な能力の必

要がある」と提案した。ハーター長官も通常兵力が「遅れている」と事態を憂慮したのである。⁽⁸³⁾

だが大統領の考えに変わりはなかった。彼は九月一五日のNSCの会合で、「われわれの関心の大部分は抑止に集中しなければならない……。小規模な限定戦争に関する多くの議論があるようだが、私の見解では、こうした戦争は全面戦争に容易に発展する」と述べ、限定戦争が限定的ではあり得ないと論じた。アイゼンハワーは「軍備のあらゆる分野でアメリカが優越していなければならない」との考えを退け、「限定戦争が全面戦争を引き起こすことなく起きると想定することは、危険である。……わが国の主要な努力はソヴィエトに対して、ソ連が何をしようが、もしアメリカを攻撃するならば、破壊の雨に会うことを納得させることに傾注されるべきである」と再度強調し、アメリカが「本当に懸念するべき唯一の戦争は全面的な核戦争」との立場を崩さなかったのである。⁽⁸⁴⁾

結局、アイゼンハワー大統領はこの年、基本的な安全保障政策の文書の策定を命ずることはなかった。明らかに、限定戦争をめぐる議論を避ける気持ちが働いていた。六月末現在のアメリカの兵力は約二四七万八〇〇〇名で、前年よりさらに減っていた。しかしその一方で、年末までにアイゼンハワーは、六四年半ばまでの総計五四〇基のミニットマンの建設計画を承諾したのである。これは豊富な核攻撃力を維持する大量報復戦略に則った手段であったが、同時にミサイル・ギャップ論の圧力に屈した措置でもあった。⁽⁸⁵⁾

激しい大統領選挙戦を戦うニクソン、そしてアイゼンハワーに大きな政治的打撃を与えたのが、一〇月にメディアに漏洩した合衆国広報庁の調査結果であった。この調査によると、西ヨーロッパのほとんどの国でより多くの人が宇宙開発ではソ連が先行していると信じているばかりか、二〇年から二五年後にはソ連がアメリカよりも強力になると信じているからであった。これより少し前の六〇年二月に発表されたギャラップ世論調査でも、西ヨーロッパ諸国の中で、ギリシア以外のフランス、イギリス、オランダ、スイス、ノルウェー、西ドイツのすべての国で多くの人が一〇年後の科学の分野で指導的な国家としてソ連の方をあげ、合衆国広報庁の調査と同様の結果を示した

のである。これらは、アメリカの威信が低下していると主張するケネディの議論を立証したかに思える内容であった。ケネディは繰り返しこの問題に触れ、「海外でのアメリカの威信の衰退はわが国の基地、同盟、安全保障、そして平和そのものを脅かしている。わが国は今一度、世界で良き善隣者として尊敬されて良い時である」と主張したのである。⁽⁸⁶⁾

この間、大統領の支持率は低落していた。一九六〇年一月には七一%を誇った高い支持率は六月には六一%に、一〇月には五八%に落ち込んだ。大統領は心臓病という持病をかかえ、ニクソンの選挙応援に赴いたのは僅かに数回に過ぎなかった。一月の大統領選挙では、ケネディが一般投票でわずか一二万票ほどの差をつけて、勝利を収めた。ケネディ辛勝の背景には、アメリカは漂流し、ソ連の挑戦に決然と答えていないと感じる多くの国民の説得に大統領が失敗したことがあった。大統領が二月に、有識者からなる「国家目標委員会」を設置したこと自体、国民の不安に答えようとした試みであった。⁽⁸⁷⁾

一九六〇年は大統領にとって失望が多い一年であった。訪ソの中止のみならず、日本訪問も新安保条約に反対する激しいデモで流れてしまった。そして十一月の選挙のニクソンの惜敗であった。アイゼンハワーはケネディの勝利に、過去八年間の自分の政策の拒否を感じたのである。⁽⁸⁸⁾

ただしアイゼンハワー政権の封じ込め政策に問題がないわけではなかった。まず、ミサイル・ギャップの存在を否定し、軍事予算の大幅な増額に踏み切ること拒否したものの、ミサイル・ギャップ論に影響を受け、大規模なミサイル戦力の強化を決定した。それは最終的には、六〇年代半ばまでに約一二〇〇基の戦略ミサイルを建設する膨大な計画であった。これは、ミサイル・ギャップはおそらく存在しないという大統領の健全な直感にもかかわらず、とられた方針であった。ケネディ次期政権が柔軟反応戦略を採択し、通常兵力の増強に乗り出すことができた前提には、アイゼンハワーが残したこのミサイル計画があった。さらに、アイゼンハワーはアメリカの強い立場に

関する明快な説明に欠いていた。ケネディ政権で国家安全保障問題担当大統領補佐官に就くバンディ (McGeorge Bundy) が述懐するように、アイゼンハワーはなぜミサイル・ギャップ論を信じなかったのか、その理由を国民にはつきりと述べず、またソヴィエトの指導者がこの種の重大な問題では好戦的な言辞にかかわらず、極度に慎重であることをやはり公に語ることはなかった。「アイゼンハワーは賢明なことをやり、愚かなことに抵抗したが、彼ほど事態を理解していない人物が主導する国民的議論の継続を許容してしまったのである」⁽⁸⁹⁾

第三に、アイゼンハワー政権の第三世界政策、とくにインドネシアのスカルノ (Soe Sukarno) 政権の転覆工作、キューバに対する硬直した姿勢、インドシナに対するコミットメントの深化、そしてコンゴ動乱への関与はいずれもケネディ政権に負の遺産を残すものであった。大統領はすでにCIA立案のキューバ侵攻作戦を承認し、あとはその実施を待つばかりであった。⁽⁹⁰⁾

最後に、一九六〇年末には、再び国際的な影響を与えかねない事件がアメリカ国内で、しかも首都の近郊で起きた。第三世界に広まる冷戦を戦う上で、アメリカが回避できない問題、すなわち人種問題であった。発端は一月に、ワシントンで大統領に信任状を提出したばかりの中央アフリカ共和国の国連代表がニューヨークに戻る帰途、ボルティモアのレストランで食事のサービスを拒否されたことであった。アメリカの国連代表部は事件が「すべてのアフリカ諸国の代表に知られている」と国務省に報告し、大統領が謝罪の手紙を送るよう提案した。ハーター国務長官の勧告をいれ、アイゼンハワー大統領は中央アフリカ共和国代表に宛て、「非常に不幸な出来事」に対する「深い遺憾の意」を表明し、政府が「国内におけるそのような事件の原因の除去に努力しており、わが国の努力がこの目標に向かって続くであろう」と約束したのである。⁽⁹¹⁾

モスクワにおける台所論争が経済競争の重要性を示したように、この事件はアメリカが国内の人種差別に真剣に対処する必要を改めて迫るものであった。すでにこの年の二月には、ノース・カロライナ州の黒人学生によって、

白人顧客のみへのサービスに抗議する座り込み、いわゆる「シットイン」が始まっていた。キング (Martin Luther King, Jr.) 牧師のモントゴメリー (アラバマ州) におけるバス会社に対するボイコット運動に触発されたこの運動は、またたくまに南部全域に広まっていった。⁽⁹²⁾

アイゼンハワー政権の閣僚では、ロッジ国連大使が人種差別の是正の必要を訴えて倦むことがなかった。彼は五九年末の閣議で、「この分野での進展が政治的のみならず、アメリカの対外関係にとって、いかに重要であるか」と言明し、次のように続けた。「世界全体を見ると、人種の圧倒的多数派は有色である。……これはあまりに重要な問題であり、世界の注視のなかでわが国の存立に影響を与えよう。……世界中立の人々は、決して友好的ではない目で、われわれを見ている……。……この問題は誘導ミサイルや他のどのようなものとも同じくらい大きな問題である。もしわれわれがこの問題に打ち勝つことができれば、世界中でソ連に勝利を収めることができよう。」そしてロッジは「国内の人種差別問題によって、われわれの対外関係に与える害」を強調し、「リトル・ロックのよくなたつた一つの事件が取り返しのつかない損害を与える」と警告したのである。

しかしロッジの懸念に対するアイゼンハワーの質問は、彼が人種問題の本質を理解していないことを示していた。「連邦軍の派遣が法の支配を維持するためのわれわれの決意を示すことにより、なぜ国益を向上させることではなく損なうことなのか？」⁽⁹³⁾

公民権問題は、新政権が対処しなければならないもう一つの重要な課題であった。

十一 おわりに

アイゼンハワー大統領は一九六一年一月一二日に最後の一般教書を発表した。このなかで彼は五八年の米ソ文化交流協定の締結、モスクワのアメリカ博覧会の「成功」に言及し、またアメリカの軍事力が強力であることを強調

した。さらに彼は数年前の爆撃機ギャップ論が「虚構」であったと指摘し、今回のミサイル・ギャップ論も「同様のあらゆる徴候を示している」と断言したのである。彼の判断は的確であった。実際のソ連のICBM戦力は一九六一年で三五基に過ぎなかったからである。そしてこの教書でアイゼンハワーは改めて野放図な軍事予算の膨張を戒め、「この長期的な闘争において、適切な管理が命ずるところでは、われわれは断固過小な支出に反対しなければならぬように、過大な支出に抗しなければならぬ。軍事機構に無益に費やされるあらゆるドルがわが国の力、つまりは安全を弱める」と宣言した。アイゼンハワーが五日後の告別演説で「軍産複合体」の形成を警告した時、そこには、肥大化する国防費とそれに利益を見いだす軍部、軍需産業界に対する深刻な憂慮があった。⁹⁴

アイゼンハワー政権の大量報復戦略が軍事費を四〇〇億ドル程度に終始抑えることに成功し、予算節減に効果を発揮したことは明らかであった。アイゼンハワーによると、米ソ間で軍事的な相互抑止体制が事実上成立した以上、この程度の国防費で充分であった。しかも国家予算、なかでも国防費の大きな伸びは、長期的にアメリカの政治・経済体制を変質させる危険があるというのが、大統領の固い信念であった。大量報復戦略はまた、通常兵力を軽視したわけではなく、まず同盟国からの供出を期待する前提があった。確かにアイゼンハワーは陸軍の削減を進めたが、それでも六〇年段階でその兵力は八七万名に達しており、これは朝鮮戦争前より二四万名多い数字であった。大統領は限定戦争が全面戦争に発展する可能性は高いと考えていたが故に、それにとくに備えることには懐疑的なのであった。最後に、アイゼンハワーはフルシチョフが自殺的な核戦争を始めることはないことを確信していた。一九五五年のジュネーブ、五九年のキャンプ・デーヴィッドでの二度にわたる会談の印象、成果であった。彼はソ連のミサイル戦力をめぐって議論していた時に、フルシチョフが以前彼に、「私はあなた方が戦争を始めないことを知っている」と発言したことを紹介し、ソ連もアメリカと同様に合理的な判断を下すであろうことを強く示唆したのである。⁹⁵

さらにアイゼンハワー政権は相互安全保障計画に基づく軍事・経済援助の意義を理解し、五〇年代半ば以降は援助の中心を第三世界に、しかも経済分野に比重を移していた。だが対外援助、とくに経済援助の増額は難しい情勢であった。貿易収支の黒字は一九六〇年には五六年レベルの四九億ドルに回復したが、アイゼンハワー政権の危機感に変わりはなかった。大統領が厚く信頼するアンダーソン (Robert Anderson) 財務長官は六〇年一月末の会で、「今や一時代の終わりに到達した。もはやわれわれは過去のようなことをやることはできない。われわれは世界銀行、国際通貨基金、米州開発銀行を支援し、現在ラテンアメリカの開発計画に六億ドルを支出している。全部で、われわれの支出は一〇〇億ドルの資本投下になる。もしわれわれが過去と同じような水準を実施しようとしたら、財政支出が収入を上回るであろう」と警告した。これを受けて、アイゼンハワー大統領は、「私は他の誰よりも、国際収支に関心を持っている。われわれは財政的健全さに背反することで、自滅し得ることを認識している」と述べ、国際収支の悪化を援助増の制約要因としてあげたのである。⁹⁶⁾

ただしアイゼンハワー政権の封じ込め政策を軍事、あるいは経済の領域のみで理解することは一面的である。一九五八年の文化交流協定は、五〇年代後半以降のソ連の脅威の性格の変化、つまり非軍事的領域での挑戦の顕在化、さらにはスターリン後のソヴィエト社会の新たな潮流に対応して、ソヴィエト体制の変容を促すための新たな封じ込め手段であった。アイゼンハワー大統領、ダレス国務長官がケネディらの批判にかかわらず、国防費の大幅な増額を拒否した背景には、米ソ間の軍事的抑止の状態、核戦力の充分性の概念の受容、財政赤字の問題、冷戦の経済的側面の重要性の増大に関する認識、U二型偵察機によるソ連の核戦力に関する情報の入手があった。しかし同時に、軍拡競争で国際緊張を激化させ、ソ連が外に開き始めた門戸を再び閉ざす事態を恐れたのである。アイゼンハワー政権は緊張緩和を辛抱強く続け、ソ連を対外世界との人的・文化的交流の維持、拡大に向かわせることで、ソヴィエト体制に「進化」をもたらそうと試みたのであった。モスクワのアメリカ博覧会、「アメリカの声」

が象徴する広報活動、政府首脳から一般国民に至る両国の人々の相互往来というアプローチは、好ましい成果をあげていた。⁽⁹⁷⁾

この点で、U二機事件の直後にアイゼンハワーが、「フルシチョフが通常よりも悪質な立ち居振る舞いをする度に、われわれは興奮するべきではない」と戒めた発言は示唆的であった。彼があえてフルシチョフの挑発、挑戦的な言動を受け流し、抑制的な封じ込めを続けた背景には、フルシチョフの根柢に乏しい豪語、自慢をいちいち取り合わないアイゼンハワーの落ち着いた政治的・外交的判断があった。冷戦は長期にわたる闘争であるが故に、冷静な対応をとり続けることが肝要なのであった。⁽⁹⁸⁾

一九六一年一月二〇日に発足したケネディ政権は大量報復戦略に代わり、テイラー将軍が提案する柔軟反応戦略を採択し、すぐに軍事予算の増額に乗り出した。しかし人的・文化的交流路線は継続する用意があった。実はケネディは五八年の米ソ協定の支持者であり、合衆国広報庁の活動を熱心に推進してきた上院議員の一人であった。彼は合衆国広報庁の新しい長官に著名なジャーナリストのモロー (Edward Murrow) を起用した。さらにケネディは大統領に就任してすぐに、ラスク (Dean Rusk) 新国務長官に「鉄のカーテンの向こう、とくにポーランドとソ連との人的交流」につき、「その促進」に関する覚書の提出を命じた。ケネディはこの分野ではアイゼンハワーの方針を踏襲し、これを拡大する姿勢を明らかにしたのである。⁽⁹⁹⁾

かつてケナンは論文「ソヴィエト行動の源泉」のなかで、「封じ込め」政策の適用により、アメリカは「ソヴィエト権力の崩壊かまたは暫時的な温和化」につながる傾向を促進する力を有していると主張した。ケナンの予言はおよそ四〇年後に実現した。ソヴィエト権力の瓦解は、アメリカの一貫した強い軍事的、経済的な圧力によるものであったことは確かであった。しかし同様に重要な要素は、アメリカのソヴィエト圏に対する文化的、イデオロギ一的な攻勢であった。これは、一九七五年の全欧安保協力首脳会議のヘルシンキ宣言の採択、とりわけこの宣言で

約束された人権の尊重、人的・文化的交流の実施がソヴィエト社会に対する西側諸国の価値観の浸透を可能ならしめ、最終的にソヴィエト圏崩壊の重要な媒介となった経緯で立証された。ヘルシンキ宣言は冷戦の終結に向かう決定的な契機であった。しかしこのヘルシンキ宣言に遡ること二〇年前に、アイゼンハワー政権は東西交流の名のもと、ソヴィエト圏に対する平和的な浸透を開始していたのである。NSC五六〇七で定義した対ソ目標に向かうアイゼンハワー大統領とダレス国務長官の努力はついに実を結んだのである。⁽¹⁰⁾

- (一) 本論文の一部は、Takuya Sasaki, "The Eisenhower Administration's Containment Policy and East-West Exchanges, 1955-1960 (Conclusion)," *Rikkyo Hogaku* 57 (January 2001), 22-57 に於ける。
- (二) Memorandum of discussion at the 395th meeting of the NSC, January 29, 1959, U.S. Department of State, *Foreign Relations of the United States* (以下FRUSと記す) : 1958-1960, X (Part 1), 260 (Washington, D.C. : 1996), 260 ; an intelligence estimate, December 23, 1958, *ibid.*, X (Part 1), p. 260 n.2 ; Twinning testimony, Senate Foreign Relations Committee, January 16, 1959, *Executive Sessions*, 86th Congress, 1st Session (Washington, D.C. : 1982), p. 20 ; memorandum of conversation with the President, January 12, 1959, *FRUS : 1958-1960*, III, 172.
- (三) Memorandum of conversation with the President, January 12, 1959, *ibid.*, III, pp. 172-73 ; memorandum of conference with the President, February 9, 1959, *ibid.*, III, p. 182.
- (四) Memorandum of telephone conversation with Dulles, March 6, 1959, John Foster Dulles Papers, Telephone Calls Series, Box 9, Dwight D. Eisenhower Library, Abilene, Kansas ; memorandum of conversation, March 20, 1959, *FRUS : 1958-1960*, VII, 515 ; McElroy testimony, Senate Foreign Relations Committee, January 16, 1959, *Executive Sessions*, 86th Congress, 1st session, p. 18 ; *FRUS : 1958-1960*, III, 180 ; memorandum of conference with the President, February 9, 1959, *ibid.*, III, pp. 182, 183, *また* マイケル・ロー政権はソ連の軍事水準に油断していたわけではなかった。マッケルロイ国防長官は三月初旬のNSCの会合で、現在米ソの国防費は均等であるが、「一九六三年にはソ連が一九五八年の額の五〇%増に達すると予測した。あるいはダレスCIA長官が八月、アメリカは「明白な軍事的優位」を維持しているものの、ソ連のICBMと中距離ミサイルの獲得は「この状況を変えつつあり」、米ソの軍事的優位は「例えば一九六一年、あるいは一九六二年までに」……主導権を握る方にあるという段階におそらく到達するであろう」と警告したのがある。Memorandum of discussion at the 389th meeting of the NSC, March 5, 1959, *ibid.*, III, p. 190 ; Allen Dulles memorandum, August 18, 1959, *ibid.*, III, pp. 317-18.
- (五) Memorandum of discussion at the 430th meeting of the NSC, January 7, 1960, *ibid.*, III, p. 354 ; Robert J. Watson, *History of the Office*

- of the Secretary of Defense, Vol. W : Into the Missile Age, 1956-1960 (Washington, D.C. : 1997), pp. 457, 369, 371, 375.
- (9) Arnold L. Horelick and Myron Rush, *Strategic Power and Soviet Foreign Policy* (Chicago : 1965), p. 51n ; Edgar M. Bottome, *The Missile Gap : A Study of the Formulation of Military and Political Policy* (Rutherford, N.J. : 1971), p. 97 ; Jackson address before the National War College, April 16, 1959, John F. Kennedy Papers, Pre-Presidential Papers, Senate Files, Holborn Research Materials, 1958-1960, Box 568, John F. Kennedy Library, Boston. シャンマンは「雄雄」ワサン・キヤマン論を唱へる最も強硬な上院議員の一人であった。
- Robert G. Kaufman, *Henry M. Jackson : A Life in Politics* (Seattle : 2000), pp. 86-94.
- (10) Interview with Kennedy by Philip Deane, undated (March 1959), Kennedy Papers, Pre-Presidential Papers, Senate Files, General Files 1953-1960, Box 539, マネキニシニ「上院本会議ではさうして」「総務キヤマン」と題する演説をなしたが「わが国の安全保障のために」「サナル・キヤマン」と同様に明白に現在の危機を告げる「総務キヤマン」をこぼし、先進国や開発途上国での生活水準の「キヤマン」所帯の「キヤマン」がアメリカに重大な挑戦を提供していると言明した。Kennedy Senate Speech, February 19, 1959, in W. W. Rostow, *Eisenhower, Kennedy, and Foreign Aid* (Austin, Texas : 1985), pp. 156-58.
- (11) Report by the Advisory Council of the Democratic National Committee, "The Military Forces We Need and How to Get Them," July 1959, W. Averell Harriman Papers, Box 390, Library of Congress.
- (12) George H. Gallup, *The Gallup Poll : Public Opinion, 1935-1971*, Vol. 3 (1959-1971) (New York : 1972), pp. 1597, 1654.
- (13) Memorandum of discussion at the 394th meeting of the NSC, January 22, 1959, *FRUS : 1958-1960*, III, 174 ; memorandum of conference with the President, July 2, 1959, *ibid.*, pp. 228, 229, 232, 233 ; memorandum of discussion at the 412th meeting of the NSC, July 9, 1959, *ibid.*, p. 240 ; memorandum of conference with the President, July 14, 1959, *ibid.*, p. 254. 「その後は」「政策企画担当次官補」の最も重要な役割の1つは「戦略的な核政策について」「大量報復から通常兵力にたより多く依存する方向へ重要な再検討に至る道を開いた」ことを挙げ、次期政権の柔軟反応戦略につながる貢献をしたと自費している。Gerard C. Smith, *Disarming Diplomat : The Memoirs of Gerard C. Smith, Arms Control Negotiator* (New York : 1996), p. 109.
- (14) Memorandum of conference with the President, July 2, 1959, *FRUS : 1958-1960*, III, 230, 231, 233 ; memorandum of discussion at the 412th meeting of the NSC, July 9, 1959, *ibid.*, pp. 244, 239.
- (15) *Ibid.*, pp. 239-40 ; NSC 5906/1, "Basic National Security Policy," August 5, 1959, *ibid.*, pp. 295-96, 296n.1.
- (16) Memorandum of discussion at the 425th meeting of the NSC, November 25, 1959, *ibid.*, p. 344.
- (17) Notes on legislative leadership meeting, March 10, 1959, President Eisenhower's Meetings with Legislative Leaders, 1953-1961, edited by Robert Lester (Frederick, Md. : 1986) (ペンモンメント版), Reel 2 ; memorandum of conference with the President, May 19, 1959, Eisenhower Papers, Whitman File : DDE Diary, Box 41. 大統領は数ヶ月後に国防長官や次官のようには話さなかった。「われわれは五年以内予算を均衡させなければならぬ。さもなくば」「われわれは振り子の振動のように国防を運営しなければならぬ。それは軍事計画を混乱させる。も

「わが國も重税に飽きたら、國防も犠牲を被る。」 Memorandum of conference with the President, November 16, 1959, *FRUS : 1958-1960*, III, 339

- (15) Notes on legislative leadership meeting, March 10, 1959, President Eisenhower's Meetings with Legislative Leaders, Reel 2 ; memorandum of conference with the President, March 8, 1959, Eisenhower Papers, Whitman File : DDE Diary, Box 39.
- (16) Notes on bipartisan congressional meeting, January 5, 1959, President Eisenhower's Meetings with Legislative Leaders, Reel 2 ; Dulles news conference, January 27, 1959, *Department of State Bulletin* (以下 *DSB* とし、(冊) 40 (February 16, 1959), 223 ; memorandum of conference with the President, March 8, 1959, Eisenhower Papers, Whitman File : DDE Diary, Box 39.
- (17) Sasaki, "The Eisenhower Administration's Containment Policy," pp. 25-26. 本論文は、1956年6月の「トーマン・サスケイ」による連合公使ロマン人の賞賛と人気を得たトーマンを回顧している。Charles E. Bohlen, *Witness to History, 1929-1969* (New York : 1973), pp. 389-90. 1954年夏にトーマンを訪れたトーマン財団の国際交流系ロマン担当官「マンリカ大使」の「トーマン・サスケイ」の「トーマン・サスケイ」公使を強調している。Volker R. Berghahn, *America and the Intellectual Cold Wars in Europe : Shepard Stone between Philanthropy, Academy, and Diplomacy* (Princeton : 2001), p. 172.
- (18) Operations Coordinating Board Trade Fair Committee report, May 27, 1957, Eisenhower Papers, White House Office, National Security Council Staff : Papers, 1952-61, OCB Central Files Series, Box 13 ; Lacy testimony quoted in Charles H. Taquetry to Leslie Brady, June 4, 1957, *ibid*.
- (19) Cullman to Eisenhower, November 12, 1957, RG 43, Records of International Conferences, Commissions, and Expositions, Records Relating to U.S. Participation in the Brussels Universal and International Exhibition of 1958, Box 22, National Archives II, College Park, Maryland ; Cullman to Herrer, October 28, 1957, RG 43, Records of International Conferences, Commissions, and Expositions, Office of the U.S. Commissioner General, Brussels Exhibition, 1958, Records of the Office of the U.S. Commissioner General, Box 8. 万国博覧会(歴史)の「吉見俊哉『博覧会と政治学——きみたちの近代』(中央公論社、一九九二年)を参考にした。
- (20) Eisenhower to Dulles, November 16, 1957, Records of International Conferences, Commissions, and Expositions, Records Relating to U.S. Participation in the Brussels Universal and International Exhibition of 1958, Box 22 ; Gerson H. Lush to Jack Z. Anderson, undated, Central Files, Official File, International Trade Fair (4), Box 720, Eisenhower Library ; Cullman report, "The United States at the Brussels Universal and International Exhibition, 1958," May 30, 1958, *ibid*, Brussels Universal and International Exhibition (5), Box 721. ノーマン元大統領の「トーマン」は「トーマン」国務長官の「トーマン」だ。Dulles to Eisenhower, March 27, 1958, *ibid*, Brussels Universal and International Exhibition (5), Box 721.
- (21) Report by the Bureau of Intelligence and Research, "The Soviet Bloc Exchange Program, 1958," January 30, 1959, O.S.S./State Department Intelligence and Research Reports, Part XI : The Soviet Union, 1950-1961, Supplement (Washington, D.C. : 1979) (「ソビエト

- トランスムニエ)のロケットマンを諷刺するジョーシキ' Robert W. Rydell, *World of Fairs: The Century-of-Progress Expositions* (Chicago: 1993), pp. 193-211.
- (62) *DSB* 39 (October 13, 1958), 577-78; *ibid.* 40 (January 26, 1959), pp. 132-34.
- (63) Reed undated memorandum, 611.6/10-158, RG 59, General Records of the Department of State, Central Decimal File, 1955-1959, Box 2175, National Archives II.
- (64) Svard memorandum, "U.S. National Exhibit, Gorki Park, Moscow 1959," October 2, 1958, enclosed in Reed undated memorandum, 611.6/10-158, *ibid.*; USIA paper, "Basic Policy Guidelines for the U.S. Exhibit in Moscow in 1959," RG 306, Records of the U.S. Information Agency, Records Relating to the American National Exhibition, Moscow, 1957-59, Box 7, National Archives II.
- (65) Thompson to the Department of State, November 17, 1958, *ibid.*; Thompson to the Department of State, October 3, 1958, 861.191-MO/10-358, Confidential U.S. State Department Central Files; The Soviet Union, 1955-1959, Internal Affairs (Frederick, Md.: 1989) (トランスムニエト説).
- (66) "Transcript of Tape Recordings: White House Conference, Moscow Fair," January 1959, Records of the U.S. Information Agency, Records Relating to the American National Exhibition, Moscow, 1957-1959, Box 7.
- (67) White House Press Lease, May 21, 1959, Central Files, Official File, Moscow Trade Fair (2), Box 722.
- (68) Eisenhower statement for meeting with leaders of Plastics Industry, February 10, 1959, *ibid.* 英外務省のソ連専門家たちは次のように予断した。「このソ連の計画が実現するならば、アメリカ博覧会はソ連エネアの世論に大きな影響を与えよう。努力と費用は十分な見返りがあろう。美露のソ連ソ連は重大な誤算を犯さざるを得ない。」Peter Maxey's memorandum, February 9, 1959, FO 371/143575/NS 1861/2, Public Record Office, London.
- (69) *New York Times*, June 30, 1959; Raymond L. Garthoff, *A Journey through the Cold War: A Memoir of Containment and Coexistence* (Washington, D.C.: 2001), p. 76; Katherine G. Howard, "The 'Fair' Way to Make Friends," undated, Katherine G. Howard Papers, Box 26, Eisenhower Library; Eisenhower's extemporaneous remarks to the group going to the Moscow Exhibit, June 15, 1959, Eisenhower Papers, Whitman File: DDE Diary, Box 42.
- (70) Frederick C. Barghoon, *The Soviet Cultural Offensive: The Role of Cultural Diplomacy in Soviet Foreign Policy* (Princeton: 1960), p. 1.
- (71) "Seventh Semi-Annual Report: the President's Special International Program, July 1, 1959-December 31, 1959," the President's Committee on Information Activities Abroad (Sprague Committee): Records, 1959-61, Box 14, Eisenhower Library; McClellan report on the American National Exhibition in Moscow, December 1959, *ibid.*, Box 19. 有名なトランスムニエト説諷刺ジョーシキ' Walter L. Hixson, *Parting the Curtain: Propaganda, Culture, and the Cold War, 1945-1961* (New York: 1997), pp. 172-213.

- (62) *New York Times*, July 25, 1959. ニクソンは開会式で挨拶を述べた後、ソ連国民に「ソ連を訪問し、ソ連の歴史を語り、ソ連の発展を祝う」と述べた。米ソ交流の拡大を語った。Nixon radio-television address, August 1, 1959, Central Files, Official File, Stalin's Death and Reactions, Results of the President's Speech (1), Box 892. ニクソン自身の語り「Richard M. Nixon, *RV: The Memoirs of Richard Nixon* (New York: 1978), pp. 203-13. :
- (63) Thompson to Herter, July 31, 1959, 861.191/7-31-59, U.S. State Department Central Files : The Soviet Union, 1955-1959, Internal Affairs. ニクソンは後述のニクソン大使に「副大統領ニクソンを好むべきなら」と言明している。Thompson to Herter, January 1, 1960, *FRUS: 1958-1960*, IX, 160.
- (64) Memorandum of conversation, September 26, 1959, *ibid.*, X (Part 1), p. 469. Nikita Khrushchev, *Khrushchev Remembers: The Last Testament*, translated and edited by Strobe Talbott (Boston: 1974), p. 364. 邦訳『ニクソン最後の遺言』上(新潮社: 一九七五年)八一頁。
- (65) Watson to Eisenhower, July 31, 1959, Central Files, Official File, Moscow Trade Fair (2), Box 722; Nixon to Eisenhower, July 31, 1959, *FRUS: 1958-1960*, X (Part 1), 377; Frees to Herter, September 8, 1959, 861.191-MO/9-8-59, Confidential U.S. State Department Central Files : The Soviet Union, 1955-1959, Internal Affairs.
- (66) White report, "Visitors Reactions to the American Exhibit in Moscow : A Preliminary Report," September 28, 1959, the President's Committee on Information Activities Abroad (Sprague Committee) : Records, 1959-1961, Box 14, ホンター氏の報告書と同時に「ソ連の国民のロシア人に対する姿勢を厳しく批判するべきを述べた。彼は多くのロシア人のアメリカに対する「友好的な態度」と「ソ連向け対照的なことだ。ほとんどのアメリカ人のロシア人に対する無関心」をあげ、「何年にもわたる共産主義者の強烈な反米宣伝にもかかわらず、ロシア人は友好的な暖かさと誠実さを持つてくるであろう」と述べ、それはわれわれを恥ずかしと思いたるべき」と指摘した。なお展覽会の関係者は「ソ連のアメリカ人ガゼットを高く評価している」。Abbot Washburn oral history interview, May 1, 1968, p. 90, Eisenhower Library : Dwight D. Eisenhower, *The White House Years: Waging Peace, 1956-1961* (New York: 1965), p. 410. 邦訳『ニクソン回顧録——平和の戦い』下(みすめ書房: 一九六八年)三六一頁; Thompson to Herter, August 10, 1959, 861.191-MO/8-10-59, Confidential U.S. State Department Central Files : The Soviet Union, 1955-1959, Internal Affairs.
- (67) Brady to the State Department, October 6, 1959, 861.191-MO/10-6-59, *ibid.*, タッチが「五年後にモスクワを再訪した時、街頭でアメリカ博の紋章を襟につけてくるロシア人男性に出会った。この人物は「一九五九年の博覧会訪問が一生の思い出であり、愉快な思い出である」と述べた。Hans N. Tuch, *Communicating with the World: U.S. Public Diplomacy Overseas* (New York: 1990), p. 64.
- (68) State Department report, "U.S.-Soviet Exhibits a Successful Exchange," August 1959, *FRUS: 1958-1960*, X (Part 2), 37-40; Eisenhower annual message to the Congress on the State of the Union, January 12, 1961, *Public Papers of the Presidents of the United States: Dwight D. Eisenhower* (公産 EPP ヲリョク田), 1960-61 (Washington, D.C.: 1961), 916; NSC 6013, "Status of National Security

- Programs on June 30, 1960 : Part 5-The USIA Program," undated, RG 273, Records of the National Security Council Policy Papers 6005-6014, Box 52, National Archives II. 在モスクワ大使館のブライディ文化担当参事官は「アメリカ博覧会の「一風変わった副産物」として、会場を訪れた多数のソ連市民がアメリカ人ガイドに「内密に」手渡し手紙をあげた。彼らによる「手紙の内容の「最も顕著な特徴」は共産主義とソ連政府に対する「あからさまな敵意」であった。」Brady to the Department of State, September 30, 1959, 761.00/9-30-59, Confidential U.S. State Department Central Files : The Soviet Union, 1955-1959, Internal Affairs. 英国の駐ソ大使は本国外務省に宛て「モスクワ博覧会「外国に於いてソ連内で試みられた最も野心的なもの」と評価し「「大多数」のソヴェット市民が博覧会に「深い印象を受け」幾つかの特別な分野を除き、ソ連がアメリカに追いつくには「まだ当分先のことである」との結論を確認した」とも報告した。D. Patrick Reilly to Selwyn Lloyd, September 11, 1959, FO 371/143575/Ns 1861/15, PRO.
- (62) Yale Richmond, *U.S.-Soviet Cultural Exchanges, 1958-1986 : Who Wins ?* (Boulder, Col. : 1987), p. 26 ; State Department report, August 1959, *FRUS : 1958-1960*, X (Part 2), 37.
- (40) Memorandum of conference with the President, August 5, 1959, *ibid.*, X (Part 1), p. 382 ; OCB report, "Operations Plan for the Soviet-Dominated Nations in Eastern Europe," July 2, 1959, *ibid.*, X (Part 1), pp. 80-81.
- (41) Memorandum of conversation, August 5, 1959, *ibid.*, X (Part 2), pp. 218-19 ; Beam to the Department of State, August 6, 1959, *ibid.*, X (Part 2), p. 219 ; Milton Eisenhower report, "Effect of the Visit to Poland," August 6, 1959, *ibid.*, X (Part 2), pp. 221-22 ; William Macomber to Hubert Humphrey, February 20, 1959, 511.60/2-20-59, General Records of the Department of State, Central Decimal File, 1955-1959, Box 2170. 一九六〇年当時のフォーブス財団の資産は三億ドル余りであり、二位のロックフェラー財団の五倍に達していた。Bergahn, *America and the Intellectual Cold Wars in Europe*, p. 299. 大統領が最も厚く信頼するミルトン（ジョンズホプキンス大学総長）は帰国後「モスクワ滞在中にニクソンが大使公邸で泥酔した模様を報告した。もともとニクソンに複雑な感情を持つ大統領が、彼を自分の後継者に据えることを改めためらわせた要因であった。」Michael R. Beschloss, *Meadow : Eisenhower, Khrushchev and the U-2 Affair* (New York : 1986), pp. 183-84. マイクソンハワーは一九六〇年春になつて「かねて高く評価していたマンターン（Robert Anderson）財務長官の出馬を期待していた。」Stephen E. Ambrose, *Eisenhower*, Vol. 2 : *The President* (New York : 1984), pp. 559-60.
- (42) NSC 5906/1, August 5, 1959, *FRUS : 1958-1960*, III, 307, 310.
- (43) Memorandum of conference with the President, August 6, 1959, Eisenhower Papers, Whimam File : DDE Diary, Box 43.
- (44) 大統領はフルシチョフ訪米の招請をドイツ問題に関するシュネーヴ外相会談の進展と結びつけていたが、「マーフィー（Robert Murphy）國務次官代理は訪米中のコスロフ副首相に、無条件でのフルシチョフ招待を伝えた。マーフィーはこの連関を「理解していなかった」と弁明し、大統領は「非常に奇立った」と述べたが、すでに遅かった。」Memorandum of conference with the President, July 22, 1959, *ibid.* マイクソンハワーはこれより数ヶ月前にタレス國務長官に会った時、不治の病に倒れたタレスが「首脳会談に何らかの有益で積極的な成果の見通しがないければならない」と述べて、ソ連が要求する首脳会談の早期開催に反対した時、大統領はこの見解に「完全に同意」した。Memorandum of a

- conversation between Eisenhower and John Foster Dulles, March 19, 1959, *FRUS : 1958-1960*, VII, 507 ; memorandum of conversation, March 20, 1959, *ibid.*, p. 513. 一方大統領は首脳会談を必要と考へ、レーノークの託責ならぬは居るべきとの興味深き見解は、Campbell Craig, *Destroying the Village : Eisenhower and Thermuclear War* (New York : 1998), pp. 104-5.
- (48) State Department paper, "U.S. Objectives in Khrushchev Visit and Suggested Tactics for Conversation with Him," September 11, 1959, Eisenhower Papers, Whitman File ; International Series, Box 52 ; memorandum of Eisenhower's talks with Khrushchev at Camp David, undated, *ibid.* ; memorandum of conversation, September 15, 1959, *FRUS : 1958-1960*, III, 393. ノルニキョンは「インジャンプド」訪米直前に月面着陸を成功したルナ12号の模型を贈呈した。マヤゼンハワー大統領は宇宙開発については依然として醒めていた。「宇宙の分野では、確かに防衛に直接影響を与えつつもあるだろう。しかし基本的な宇宙計画は科学の問題である。……宇宙は士気にとって重要であるが、もともとが弱体化したと、世界の士気は全く異なるべきである。」Memorandum of conference with the President, November 21, 1959, Eisenhower Papers, Whitman File ; DDE Diary, Box 45.
- (49) Conversation between Khrushchev and Harriman, June 23, 1959, in Robert I. Owen to the Department of State, June 26, 1959, *FRUS : 1958-1960*, X (Part 1), 277, 279, 280.
- (47) Thompson to Hetter, July 2, 1959, 611.61/7-259 EMW, Confidential U.S. Department Central Files ; The Soviet Union, 1955-1959, Foreign Affairs (Frederick, Md. : 1989) (ペンロンメント版) ; memorandum of conference with the President, August 5, 1959, *FRUS : 1958-1960*, X (Part 1), 382. たゞこマンメン大使は別の機会だが、ノルニキョンの訪米姿勢について客観的な見解を述べた。Thompson to Hetter, August 8, 1959, 611.61/8-859, Confidential U.S. State Department Central Files ; The Soviet Union, 1955-1959, Foreign Affairs. ノルニキョンは後に「首脳会談は文化交流の促進をはかるメリカ側の狙いだが、「互連の国境を大々開き、相互の人的交流を盛んにする」ものではないとの確信を推測してゐた。Khrushchev, *Khrushchev Remembers*, pp. 409-10. 邦訳『ノルニキョンの最後の雄言』一二二―一二九頁。
- (48) Memorandum of conversation, September 21, 1959, *FRUS : 1958-1960*, X (Part 1), 439, 439n. ; memorandum of conference with the President, September 25, 1959, *ibid.*, p. 455. ノルニキョンは訪米中「ロマンチックな連日な」多への進歩が生じつつある。……中央の官僚機構の縮小、個人の自由の拡大が「多」の語りかけた時、この発言を聞き取ったのは多である。Memorandum of conversation, September 18, 1959, *ibid.*, p. 419.
- (49) Report on the Khrushchev visit, undated, *ibid.*, pp. 489-90.
- (50) Thompson to Hetter, November 13, 1959, 611.61/11-1359, Confidential U.S. State Department Files ; The Soviet Union, 1955-1959, Foreign Affairs ; Thompson to Hetter, January 1, 1960, *FRUS : 1958-1960*, IX, 160 ; Thompson to Hetter, January 18, 1960, *ibid.*, X (Part 1), p. 500.
- (51) Allen to Eisenhower, September 23 and November 5, 1959, Eisenhower Papers, Whitman File ; Administrative Series, Box 2 ; Brady to the State Department, February 20, 1960, 511.604/2-2060, General Records of the Department of State, Central Decimal File, 1960-63,

- Box 1064 ; NSC 6013, "Part 5-The USA Program", Records of the National Security Policy Papers 6005-6014, Box 52. たびたびエンロン大使は脅かすソ連共産党のV.O.A.妨害の停止の可能性を言及したトンを報告している。 Thompson to Herter, May 4, 1959, 611.61/5-459, Confidential U.S. State Department Central Files ; The Soviet Union, 1955-1959, Foreign Affairs. たまたま連中がトンをくちやぶる本拠地にする反共・反ソ放送「ラジオ自由」に対する妨害を止めようとはなかった。 CIAの財政支援を受けた「ラジオ自由」と東欧両方の「ラジオ自由ヨーロッパ」のことは、ソ連放送に携わった次の三本の興味深い回顧録を参照。 George Urban, *Radio Free Europe and the Pursuit of Democracy: My War within the Cold War* (New Haven: 1997) ; Gene Sosin, *Sparks of Liberty: An Insider's Memoir of Radio Liberty* (University Park, Penn.: 1999) ; Arch Puddington, *Broadcasting Freedom: The Cold War Triumph of Radio Free Europe and Radio Liberty* (Lexington, Ky.: 2000).
- (82) *DSB* 41 (December 28, 1959), 951-57 ; USIA paper, "The Exhibit Program in 1960-61 for the Soviet Area," March 21, 1960, *FRUS: 1958-1960*, X (Part 2), 56-58.
- (83) Memorandum of discussion at the 420th meeting of the NSC, October 1, 1959, Eisenhower Papers, Whitman File ; NSC Series, Box 12 ; memorandum of discussion at the 428th meeting of the NSC, December 10, 1959, *ibid.* ; memorandum of conversation, January 19, 1960, *FRUS: 1958-1960*, XVIII, 262-63. コムナムソロフの歴史の出来事。 Richard M. Bissell, Jr., *Reflections of a Cold Warrior: From Yalta to the Bay of Pigs* (New Haven: 1996), pp. 92-140.
- (84) Vladislav Zubok and Constantine Pleshakov, *Inside the Kremlin's Cold War: From Stalin to Khrushchev* (Cambridge, Mass.: 1996), pp. 201-2, 229-35 ; Gordon H. Chang, *Friends and Enemies: The United States, China, and the Soviet Union, 1948-1972* (Stanford: 1990), pp. 212-17.
- (85) Report by the Bureau of the Intelligence and Research, "Sino-Soviet Bloc Exchanges with the Free World in 1959," February 9, 1960, O.S.S./State Department Intelligence and Research Reports. 訪米したソ連共産党のソ連共産党の人的交流の拡大が賛賞を表している。 Notes on meeting with Mikoyan, January 14, 1959, in Michael V. Forrestal to Harriman, January 22, 1959, Harriman Papers, NY Files, Post Government's Files, Box 418 ; memorandum of conversation, January 17, 1959, *FRUS: 1958-1960*, X (Part 1), 240 ; memorandum of conversation, July 1, 1959, *ibid.*, pp. 302-3.
- (86) Report by the Bureau of Intelligence and Research, "The Soviet Bloc Exchange Program, 1958," January 30, 1959, O.S.S./State Department Intelligence and Research Reports ; memorandum of discussion at the 407th meeting of the NSC, May 21, 1959, *FRUS: 1958-1960*, X (Part 2), 26. コロンブス大船長をいっせいに三つのロシア人留学生のうちの一人がアレクサンダー (Alexander Yakovlev) ー 一九八〇年代のソ連共産党の知識者の一人となるべきであった。 Jack F. Matlock, *Autopsy on an Empire: The American Ambassador's Account of the Collapse of the Soviet Union* (New York: 1995), pp. 74-76. 国務省国際文化関係局を率じたチャーター (Robert Thayer) 氏後継トニーヤンソフが学生交換計画に「非特に関心を寄せた」とを指摘している。 Robert Thayer oral interview, June 12, 1972, Eisenhower

Library.

- (25) Intelligence report, "Sino-Soviet Bloc Exchanges with the Free World in 1959," February 9, 1960, O.S.S./State Department Intelligence and Research Reports ; Intelligence Report Prepared by the Bureau of Intelligence and Research, "Contracts between the Free World and the Sino-Soviet Bloc-A Review", October 30, 1959, *FRUS : 1958-1960*, X (Part 2), 50.
- (26) Dulles testimony, Senate Foreign Relations Committee, January 18, 1960, *Executive Sessions*, 86th Congress, 2nd Session, p. 8 ; NIE 11-8-59, "Soviet Capabilities for Strategic Attack through Mid-1964," February 9, 1960, *FRUS : 1958-1960*, III, 376 ; Twining to Thomas Gates, July 5, 1960, Nathan Twining Papers, Box 113, Library of Congress ; memorandum of discussion at the 425th meeting of the NSC, November 25, 1959, *FRUS : 1958-1960*, III, 347.
- (27) Memorandum of discussion at the 430th meeting of the NSC, January 7, 1960, *ibid.*, p. 356 ; Gates testimony, January 19, 1960, in W. E. Gathright memo, February 15, 1960, General Records of the Department of State, Records of the Policy Planning Staff, 1957-61, Box 121.
- (28) Herter testimony, Senate Foreign Relations Committee, January 21, 1960, *Executive Sessions*, 86th Congress, 2nd Session, p. 67 ; memorandum of discussion at the 434th meeting of the NSC, February 4, 1960, *FRUS : 1958-1960*, III, 372 ; Gates interview, March 10, 1960, *DSB 42* (April 11, 1960), 557.
- (29) Memorandum of discussion at the 430th meeting of the NSC, January 7, 1960, *FRUS : 1958-1960*, III, 356-67 ; Lodge to Herter, February 9, 1960, *ibid.*, X (Part 1), p. 507.
- (30) リンチャー・ド・ストゥニス 『世界情勢とアメリカ一九六〇年』(鹿島守之助訳、鹿島研究所、一九六一年)一七、三五、三七頁；memorandums of conferences with the President, November 3, 1959 and January 20, 1960, Eisenhower Papers, Whitman File ; DDE Diary, Box 45 ; memorandum of discussion at the 445th meeting of the NSC, May 24, 1959, *FRUS : 1958-1960*, IX, 510.
- (31) Thompson to Herter, January 29, 1960, 761.00/1-2960, Confidential U.S. State Department Central Files ; The Soviet Union, 1960-January 1963, Internal Affairs (Bethesda, Md. ; 1998) (ペンシオンメント版). アンソニー大使は「月初旬に『ソ連の急激な伸び』と進化的な「事態は大体われわれの有利に進んでおり、究極的にはソ連との本當の歩み寄りが可能となる状況が生まれるべき」と分析し、¹⁵⁸ Thompson to Herter, January 2, 1960, *FRUS : 1958-1960*, IX, 162-65.
- (32) Merchant to Foy Kohler, March 16, 1960, in Thompson to Herter, January 29, 1960, 761.00/1-2960, Confidential U.S. State Department Central Files ; The Soviet Union, 1960-January 1963, Internal Affairs ; Bohlen to Herter, May 6, 1960, 761.00/5-660, *ibid.* ; Lacy to Raymond A. Hare, March 7, 1960, 511.61/3-760, General Records of the Department of State, Central Declass File, 1960-63, Box 1064.
- (33) Report by the Bureau of Intelligence and Research, "Sino-Soviet Bloc Exchanges with the Free World in 1959," February 9, 1960, O.S.S./State Department Intelligence and Research Reports.

- (95) Memorandum of discussion at the 434th meeting of the NSC, February 4, 1960, *FRUS : 1958-1960*, III, 370-71 ; NIE 100-60, "Estimate of the World Situation," January 19, 1960, *ibid.*, pp. 362-66.
- (96) Also see articles, January 25-29, 1960, *The New York Herald Tribune* ; Bottome, *The Missile Gap*, pp. 133-34 ; Church speech quoted in LeRoy Ashby and Rod Gramer, *Fighting the Odds : The Life of Senator Frank Church* (Pullman, Washington : 1994), p. 119 ; Gallup, *The Gallup Poll*, p. 1654.
- (97) Notes on the legislative meeting, February 9, 1960, President Eisenhower's Meetings with Legislative Leaders, Reel 2 ; memorandum of discussion at the 439th meeting of the NSC, April 1, 1960, *FRUS : 1958-1960*, III, 389-92.
- (98) Lodge to Herter, February 9, 1960, *ibid.*, *FRUS : 1958-1960*, X (Part 1), p. 507 ; Aleksandr Fursenko and Timothy Naftali, "One Hell of a Gamble" : *Khrushchev, Castro, and Kennedy, 1958-1964* (New York : 1997), pp. 44-45.
- (99) *FRUS : 1958-1960*, II, 355, 383 ; Herter to Eisenhower, September 2, 1960, *ibid.*, II, p. 305 ; Thompson to Herter, September 8, 1960, *ibid.*, X (Part 1), pp. 549-50. 前述の二つの勤務について Raymond Garthoff が「この二機の主要情報を「今なき待てば」といふべき情報は「一年以上前」にサハリン・キヤンや空路を通じて伝えたに過ぎない」と述べている。Garthoff, *A Journey through the Cold War*, p. 47. 二機機事件については Beschloss, *Megday* を参照。この二機機事件の連日の主権の侵犯について非難した時、トーン (Charles De Gaulle) フランス大統領はソ連の人工衛星も同じく同じ行為を繰り返していることとした。「現在、世界の空を行き来するソビエトの衛星があり、一日一八回フランスの上空を、むしろ飛行機よりも高く飛んでいる。しかしこの事態はわれわれには第一の天性にならなければならない。実際にはこれらの衛星は写真をとるに過ぎない。明日には恐ろしい破壊を与える立場にならなければならない。」Memorandum of conversation, May 16, 1960, *FRUS : 1958-1960*, IX, 446. トンネンションの国連総会での粗野な行動はソビエト代表団を困惑させた。四年後の失脚の一因となった。Zubok and Pleshakov, *Inside the Kremlin's Cold War*, pp. 207-8. キリン外務省のトンネンションの国連総会での行動はソビエトと同様の印象を記している。Frank Roberts to the Earl of Hope, January 17, 1961, FO 371/159534/NS 1011/1, PRO.
- (100) Report by the Bureau of Intelligence and Research, "Sino-Soviet Bloc Exchanges with the Free World in 1960," February 1, 1961, O.S.S./State Department Intelligence and Research Reports ; memorandum of discussion at the 445th meeting of the NSC, May 24, 1960, *FRUS : 1958-1960*, IX, 512 ; Thompson to Herter, June 4, 1960, Eisenhower Papers, Whitman File ; Herter-Dulles Series, Box 13 ; Brady to the State Department, July 22, 1960, 511.61/7-2260, General Records of the State Department, 1960-63, Central Decimal File, Box 1064.
- (101) Freer to the Department of State, July 18, 1960, *FRUS : 1958-1960*, X (Part 2), 67-70.
- (102) Brady to the State Department, July 28, 1960, 861.452/7-2860, Confidential U.S. State Department Central Files ; The Soviet Union,

- 1960-January 1963, Internal Affairs.
- (74) Memorandum of discussion at the 445th meeting of the NSC, May 24, 1960, *FRUS : 1958-1960*, IX, 505 ; Thanos P. Dokos, *Negotiations for a CTBT, 1958-1994* (Lanham, Md. : 1995), p. 15.
- (75) Lacy to Bohlen, April 10, 1961, 511.603/4-1061, in Frank G. Siscoe "Report on Exchanges with the Soviet Union and Eastern Europe," January 1, 1961, General Records of the Department of State, Central Decimal File, 1960-1963, Box 1063.
- (76) "Conclusions and Recommendations of the President's Committee on Information Activities Abroad," December 1960, the President's Committee on Information Activities Abroad (Sprague Committee) : Records, 1959-61, Box 26. 下の報告書に同じ頃「国家情報評価局」の「平和・個人的安全・生活水準の改善」……「自由で開放的な社会」を求めると、ニューエター大衆の欲求を指摘した。National Intelligence Estimate 11-4-60, "Main Trends in Soviet Capabilities and Policies, 1960-1965," December 1, 1960, RG 263, Records of the Central Intelligence Agency, National Intelligence Estimates Concerning Soviet Military Power, 1950-1984, Box 11, National Archives II.
- (77) *FRUS : 1958-1960*, X (Part 2), 70.
- (78) Memorandum of conference with the President, July 19, 1960, *ibid.*, III, p. 424 ; *ibid.*, II, p. 371 ; Thompson to Hertz, October 14, 1960, *ibid.*, X (Part 1), pp. 559-60 ; memorandum of discussion at the 456th meeting of the NSC, August 18, 1960, Eisenhower Papers, Whitman File : NSC Series, Box 13 ; memorandum of discussion at the 466th meeting of the NSC, November 7, 1960, *ibid.*, Box 13 ; memorandum of discussion at the 469th meeting of the NSC, December 8, 1960, *ibid.*, Box 13. ニクソンの国連への行動を中国に対する配慮と見る見解⁴⁵ Thompson to Hertz, October 14, 1960, 761.13/10-1460 ; Confidential U.S. State Department Central Files : The Soviet Union, 1960-January 1963, Internal Affairs ; Thompson to Hertz, October 14, 1960, 761.13/10-1460, *ibid.* ; John M. McSweeney to Foy D. Kohler, October 26, 1960, 761.13/10-2660, *ibid.*
- (79) Michael R. Beschloss, *The Crisis Years : Kennedy and Khrushchev, 1960-1963* (New York : 1999), pp. 22-23. 邦訳『危機の年—ケネディとフルシチョフの闘い—上』(飛鳥新社、一九九二年)三八一—三九頁。
- (80) Report on Sen. Kennedy's National Security Policy Committee, December 1960, Kennedy Papers, Pre-Presidential Papers, Transition Files, Task Force Reports 1960, Box 1074 ; Symington to Kennedy, September 2, 1960, *ibid.*, Pre-Presidential Papers, Senate Files, Legislation, Legislation Files, Box 733.
- (81) Stephen E. Ambrose, *Nixon : The Education of a Politician, 1913-1962* (New York : 1987), pp. 551-53. ニクソンは、ケネディが民主党副大統領候補に南部テキサス州のシモンソン上院議員を選出したことに対抗し、共和党内の団結をはかる必要を一層感じたのであろう。彼は党内のリベラル派を支持基盤とするロックフェラー知事に歩み寄ったのである。そこにはまた、当時四五名という最も多くの大統領選挙人を抱えるニューヨーク州の重要性もあつたのであろう。しかし一二月の投票ではケネディが約四〇万票の差でこの州を制した。もしニクソンがこの大票田をとつていれば、開票に不正があつたとみなされたテキサス州とイリノイ州の結果にかかわらず、彼が大統領に当選するところであつた。

Robert Divine, *Foreign Policy and U.S. Presidential Elections, 1952-1960* (New York: 1974), pp. 221-27; Nixon, *RN*, pp. 223-25. ハーゼンハワーは次のような厳しいロツクンフェラー評をしてゐる。「彼は明らかに大衆的な魅力をもつてゐるが、哲学的な才能には恵まれてゐない。……彼は御しがたい個人的野心をもつてゐる。」Eisenhower telephone call, July 19, 1960, Eisenhower Papers, Whitman File: DDE Diary, Box 51.

(82) Minutes of cabinet meeting, June 3, 1960, Minutes and Documents of the Cabinet Meetings of President Eisenhower, 1953-1961, edited by Paul Kesaris and Joan Gibson (Washington, D.C.: 1980) (ペンソントン版), Reel 10.

(83) Craig, *Destroying the Village*, pp. 114-15; memorandum of conversation, October 14, 1960, General Records of the Department of State, Records of the Policy Planning Staff, 1957-1961; memorandum of conversation, September 27, 1960, *ibid.*, Records Relating to State Dept. Participation in the Operations Coordinating Board and the National Security Council, 1947-63, Box 111; memorandum of discussion at the 469th meeting of the NSC, December 8, 1960, *FRUS: 1958-1960*, III, 497.

(84) Memorandums of discussions at the 459th and 453rd meetings of the NSC, September 15 and July 28, 1960, Eisenhower Papers, Whitman File: NSC Series, Boxes 13 and 12; memorandum of discussion at the 469th meeting of the NSC, December 8, 1960, *FRUS: 1958-1960*, III, 494-95; ハーゼン大統領特別補佐官の印象は「アイゼンハワーは「限定戦争の話をしたから、その話題が嫌いではなかった。」James H. Polk memorandum for the record, October 6, 1960, *ibid.*, III, p. 481.

(85) Staff Notes No. 809, July 25, 1960, Eisenhower Papers, Whitman File: DDE Diary, Box 51; Watson, *Into the Missile Age*, p. 372.

(86) Divine, *Foreign Policy and U.S. Presidential Elections*, pp. 280-81; Gallup, *The Gallup Poll*, p. 1653. 一九六〇年の大統領選挙におけるケネディ候補については、松岡完『一九六一年ケネディの戦争—冷戦—ネトナム・東南アジア』(朝日新聞社、一九九九年)、二七—三三頁。

(87) Gallup, *The Gallup Poll*, pp. 1651, 1675, 1690; ステュونس「世界情勢とアメリカ—一九六〇年」、『三』四九頁。なおアイゼンハワー大統領の在任中の最後の支持率は五九%であった。Gallup, *The Gallup Poll*, p. 1701. アイゼンハワーは八月の記者会見で、大統領選挙戦で国政へのルでの行政経験を誇るニクソンについて、彼が実際に重要な政策決定を下した例をあげるように執拗に質問された時、次のように答へ、「ニクソンに大打撃を与えた。」一週間の時間をくれたは、一つへんは思ひつかもしたくない。覚えてゐない。」Ambrose, *Eisenhower*, p. 600. 大統領が選挙戦の終盤で思い切った遊説をできなかった背景に、心臓発作の恐れがあった。最近の研究によると、アイゼンハワーが一九四九年三月、コロンビア大学総長時代に患った病氣は、従来言われてきた腸の消化不良ではなく、軽度の心臓発作であったという。しかも五三年四月の有名な「平和のための機会」演説の際の体調不良も、腸炎ではなく、実際には心臓の疾患ではないかとの書は指摘する。したがってこれまで一回目の心臓発作とみなされてきた一九五五年のケースは、実は三度目のものであったといふことになさる。Robert E. Gilbert, *The Mortal Presidency: Illness and Anguish in the White House* (New York: 1998), pp. 115-16, 81-99.

(88) 一九六〇年の新安保条約により、アメリカは日本との関係の長期的安定化に成功した。日米安保条約の改定については、坂元一哉「日米同盟の絆」(有斐閣、二〇〇〇年)を参照。

- (92) Peter J. Roman, *Eisenhower and the Missile Gap* (Ithaca: 1995), pp. 150-51, 190; Saki Dockrill, *Eisenhower's New-Look National Security Policy, 1953-61* (London: 1996), p. 266; McGeorge Bundy, *Danger and Survival: Choices about the Bomb in the First Fifty Years* (New York: 1989), p. 349.
- (93) Audrey R. Kahin and George McT. Kahin, *Subversion as Foreign Policy: The Secret Eisenhower and Dulles Debate in Indonesia* (Seattle: 1995); Fursenko and Natfali, "One Hell of a Gamble"; Richard E. Welch, Jr., *Response to Revolution: The United States and the Cuban Revolution, 1959-1961* (Chapel Hill: 1985); 空國「一九六一ケネディの戦争」三四一四六頁; David L. Anderson, *Tropped by Success: The Eisenhower Administration and Vietnam, 1953-61* (New York: 1991); Dockrill, *Eisenhower's New-Look National Security Policy*, pp. 230-33. フルヒッチョフは六〇年七月に核兵器ごみキョーを防衛を打ち出し、九月に「エーモン」をひたカストロに、この方針を確認した。Fursenko and Natfali, "One Hell of a Gamble," pp. 52, 61.
- (94) *FRUS: 1958-1960*, II, 438-39.
- (95) James T. Patterson, *Grand Expectations: The United States 1945-1974* (New York: 1996), pp. 430-33. ケネディの要因には、彼が「〇月未だシヨールミン州へおちぶな交通法規違反で逮捕されたキムン牧師の釈放を働きかけたこと」で、黒人有権者の支持を得たことがあった。Ibid., p. 440.
- (96) Minutes of cabinet meetings, December 18 and November 6, 1959, Minutes and Documents of the Cabinet Meetings of President Eisenhower, Reel 10 and 9, ただし人種差別にソヴェト社会も無縁ではなかった。一九五九年十二月の國務省調査・研究局の報告書によると、開發途上国からソ連にやってくる多数の留学生は「研究状況に不満を、ソヴェトの生活に幻滅して」おり、「ソヴェト体制は彼らが模倣するべきものではない」と確信して帰国した。Intelligence report, "The Impact of Study in the USSR on Free World Students," December 18, 1959, *FRUS: 1958-1960*, X (Part 2), 51n. は浅田正樹「アメリカ大使館はソリカからオーストラリアに留学中の学生がソ連社会の人種差別にたいしてフルヒッチョフに抗議の手紙を送ったと報告した。Boris H. Klosson to the State Department, March 28, 1960, 861.41/3-2860, Confidential U.S. State Department Central Files: The Soviet Union, 1960-January 1963, Internal Affairs.
- (97) Eisenhower annual message to the Congress on the State of the Union, January 12, 1960, *EPP, 1960-61*, pp. 916, 919; Robert Divine, *The Sputnik Challenge: Eisenhower's Response to the Soviet Satellite* (New York: 1993), p. 183; Eisenhower farewell address, January 17, 1961, *EPP, 1960-61*, pp. 1037-38. すべての前年春までの「爆撃機キヤノン論は完全に消えていった。タレンシー長官はソ連の重爆撃機の生産は「非常に低水準」であると述べた一方、その理由は「非常に難しい」と説明した。*FRUS: 1958-1960*, III, 215. 大統領は退任直前の会合で、「もし自分が独裁者であれば、国家に損害を与えたいとなく、予算の二〇%をカットでしよう。無益でありながら既得権益の神聖化した機構を完全に破壊する」と豪語した。Memorandum of conference with the President, January 6, 1961, Eisenhower Papers, Whitman File: DDE Diary, Box 55. スタンス (Maurice H. Stans) 予算局長官がある時、大統領に対し「不要な予算の削減のために、二〇年毎に一度、五年間の独裁者が必要だ」と言明した時、この「馬鹿げた考え」に大統領が賛同した。やや驚きを含めて回顧してゐる。Maurice H. Stans, *One*

- of the Presidents' Men : Twenty Years with Eisenhower and Nixon (Washington, D.C. : 1995), p. 88.
- (95) Doris M. Condit, *History of the Office of the Secretary of Defense*, Vol. II : *The Test of War, 1950-1953* (Washington, D.C. : 1988), p. 225 ; Watson, *Into the Missile Age*, p. 776 ; memorandum of discussion at the 430th meeting of the NSC, January 7, 1960, *FRUS* : 1958-1960, III, 358
- (96) Memorandum of conference with the President, November 30, 1960, Eisenhower Papers, Whitman File : DDE Diary, Box 54, ハンナハワー政権の対外援助政策については Burton I. Kaufman, *Trade and Aid : Eisenhower's Foreign Economic Policy, 1953-1961* (Baltimore : 1982).
- (97) 大統領は原子力委員会、国防省の要請にかかわらず、五八年八月以来の核実験停止を続けた。Richard G. Hewlett and Jack M. Holl, *Atoms for Peace and War, 1953-1961 : Eisenhower and the Atomic Energy Commission* (Berkeley : 1989), pp. 557-61. ハンナハワー政権の事件後、偵察衛星の飛行実験に成功した。キッシンジャーは Bissell, *Reflections of a Cold Warrior*, p. 136.
- (98) Memorandum of discussion at the 445th meeting of the NSC, May 24, 1960, *FRUS* : 1958-1960, IX, 511.
- (99) Kennedy to Rusk, February 8, 1961, 511.60/2-861, General Records of the Department of State, Central Decimal File, 1960-63, Box 1063, 邦訳は Berghahn, *America and the Intellectual Cold Wars in Europe*, pp. 189-90. ソ連外務省高官はトランプン大使に「ケネディに懸念をもつていることを表明した。」大統領当選者「ケネディ」の選挙戦中の幾つかの発言が、大統領としての最初の行動はアメリカの軍事予算を増やし、アメリカの軍事力を強化して、ソ連のそれに明確な優位にたつたことを示しており、自分懸念している。そのような措置は不運であり、両国間に現在存在する緊張を増大させるであろう。」Synopsis of State and Intelligence Material Reported to the President, November 26, 1960, Eisenhower Papers, Whitman File : DDE Diary, Box 54. トランプン大使はラスタ新國務長官に宛てて「あなたは私についての問題に関する情報を知っているが」と断りながらも「私はソ連のエートの軍事力を大幅に過大評価している」と次第に確信している」と書きた。Thompson to Dean Rusk, January 30, 1961, 761.5/1-3061, Confidential U.S. State Department Files : The Soviet Union, 1960-January 1963, Internal Affairs.
- (100) [George F. Kennan] "X," "The Sources of Soviet Conduct," *Foreign Affairs* 25 (July 1947), 566-82. 邦訳は『アメリカ外交五〇年』（若波現代文庫、二〇〇〇年）、一五九-一九一頁に収録。冷戦終結をもたらしたケルソンの宣言の重要性については、当時の政策決定者のみなから、研究者の間でも意見が一致してゐる。たとえば以下を参照。William G. Hyland, *The Mortal Rivals : Superpower Relations from Nixon to Reagan* (New York : 1994), p. 128 ; Henry A. Kissinger, *Diplomacy* (New York : 1994), p. 759-60. 邦訳『外交』上』（日本経済新聞社、一九九五年）、四三六-三七頁 ; John L. Gaddis, *The United States and the End of the Cold War : Implications, Reconsiderations, Provocations* (New York : 1992), pp. 25-26 ; Dana H. Allin, *Cold War Illusions : America, Europe and Soviet Power, 1969-1989* (London : 1995), pp. 179-80 ; Richard Crockatt, *The Fifty Years War : The United States and the Soviet Union in World Politics, 1941-1991* (London : 1995), pp. 233-34. 全欧安全保障協力会議、ソ連のヨーロッパの邦語文献は、百瀬宏・植田隆子編『欧州安全保障協力会議（ソ

CE)、一九七五―一九二(日本国際問題研究所、一九九二年)、吉川元『ヨーロッパ安全保障協力会議(CSCE)——人權の国際化から民主化支援への発達過程の考察』(三嶺書房、一九九四年)。

〔付記〕

本論文は、文部科学省科学研究費補助金(基盤研究C)「アメリカの封じ込め政策と東西交流、一九五五―七五年」(平成一三年度―一四年度)の研究成果の一部である。